

# ヨハネによる福音書 連続講解説教

始・二〇〇九年一月四日

至・二〇一二年九月一六日

## 辻 幸宏

本説教集は、二〇〇九年と一二年に大垣伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思ひ、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

ヨハネによる福音書は、四福音書の最後に位置し、他の三福音書（共観福音書）とは趣が異なります。一方、ヨハネの手紙（一と三）、ヨハネの黙示録と同一の著者であると考えられており、それらを参照して頂ければ願ひます。個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

### 既刊

- 共同書簡一 ヤコブの手紙
- 共同書簡二 ペトロの手紙一
- 共同書簡三 ペトロの手紙二
- 共同書簡四 ヨハネの手紙・ユダの手紙
- ヨハネの黙示録
- ヨハネによる福音書一・二・三・四

二〇二一年五月

辻 幸宏

## 序

待降節を迎え、私たちは救い主イエス・キリストの御降誕に感謝しつつ、クリスマスへの準備を始めます。三位一体なる神の第二位格、真の神であられる御子が人として遡りました。それはまさに、神を信じる私たちの罪を贖い、救い、神の子として永遠の生命を与えるために、御子御自身が十字架に架かるための遡りです。

## I 主イエスの祈り

ヨハネによる福音書一七章の祈りは非常に美しい祈りで、「大祭司の祈り」と呼ばれています。最後の晩餐の直後の祈りであり、ゲッセマネの祈りとは別であったと理解されています。祈りは、御自身のため（一～五節）、残される弟子たちのため（六～九節）、最後に弟子たちの宣教によってこれから信じてキリスト者となる私たちのため（二〇～二六節）、祈りが献げられています。

主イエスは天を仰いで祈られます。主に讚美を献げ、主に祈りを献げる時、その姿勢・態度よりも、何を祈り、何を讚美するかが重要なことです。しかし、姿勢と態度はまったく自由かといえそうですがありません。祈りと讚美の内容が問われるのであれば、主の御前にいるあなたは、罪に汚れ死に行く存在であることが示されます。主は、天地万物の創造主であり、救い主であることが示されます。そうすれば必然的に、主の御前に立つ遡りと、主を誉め称えることが、祈りの姿勢や態度に表れてきます。

## II 救済の完成としての十字架

そして主イエスは「父よ、時が来ました」と祈り始めます。今まで、「イエスの時がまだきていません」（七章三〇節、八章二〇節）でした。しかし今、「人の子が栄光を受けるときが来」ました（一二章二三節、参照・一三章一節）。御子が人となられたのは、まさにこの十字架のためでした。私たちは、この時を救済史全体の中での位置づけを考えなければなりません。

ればなりません。御子は、私たちの罪を贖い救うために人となられました。

罪はアダムとエバに始まります（創世記三章）。しかしこの時すでに、主は御子の贖いを約束してくださっていました（同三章一五節、原福音）。サタンはユダヤ人によりキリストを十字架に架けますが、それはかかとを砕くごとくです。キリストは死に打ち勝ち、復活を遂げることにより、罪・死に勝利し、サタンの頭を砕きます。そして、創造時に与えられていた神との交わりが回復し、永遠の生命が取り戻されます（参照・Iコリント一五章二一～二二節）。十字架と死からの復活こそが、キリストが地上において行われる神の御業の中心であり、神の栄光を示す時です。

キリストはこれから逮捕され、十字架に架けられていきますが、この時点ですでに勝利を宣言されます。主が天地万物の統治者であり、キリストは同等の権威を持つておられ、サタンはそれに打ち勝つことは決してありません。

御子は、天地万物が創造される前から父なる神と共におられ、栄光に包まれていた神そのものです。そのお方が、神の栄光を捨てて、人となられ、人を救うために十字架に向かつて歩まれます（五節）。今この神の栄光が取り戻されます（フィリピ二章六～一節）。まさにキリストは神としての高い状態（高举）にありましたが、人となられ律法に仕えられ、十字架に架かり、死を遂げられることにより低い状態（謙卑）を取られています。しかし、十字架の死から復活を遂げられ、天に昇られることにより、高い状態に戻られ、私たちにはキリストが救い主そのものであることがはつきりと示されています。

## III 御子によって与えられる永遠の命

三位一体なる神にはそれぞれ異なった権能があります。御父は、聖定と予定においてすべてをご計画し、天地万物を創造し、歴史において起こり来るすべてを摂理において統治しておられます。御子の与えられた権能は十字架の御業により人に罪の赦しを与え、永遠の命を与えることです。私たちは、主の崇高な救いの計画に組み入れられ、永遠の命に招かれています（二節）。

ではどのようなにすれば、神の民は、神を知り、神による救いを知り、信じることができるのでしょうか？ 三位一体なる神を知ること、つまり聖書を読み、理解することが必要です。聖書を読むことが求められます（三節）。しかし、知識として聖書を頭に入れればよいものではありません。御言葉と共に働く聖霊の導きにより、この神の御業が私たち自身のために行われていることが示されなければなりません。この時、私たちは自らの姿を知り、神を知ると、自ずと罪の悔い改めと信仰が生じてきます。私たちは、主の御前に遜り、主の御言葉に聞き従い、主に祈りつつ、遜りと主に従う善き生活が求められています。

「主によって選び出された私たち」

ヨハネによる福音書一七章六〜一〇節

二〇一一年一月二日

## 序

人は、「救われる人と、そうでない者がいることは不公平ではないか」と言います。また、「前もって選ばれているのであれば私たちは操り人形なのか」とも言われます。これらのことに対して教会は、神の御言葉を正しく理解し、また恐れずに語っていくことが求められています。

## I 全的墮落

一二月になり町中でイルミネーションが灯り始めました。希望を求めてでしょうが、神なき世にあつて真実の希望はありません。真実の希望・平和・永遠を求めるならば、唯一生きて働く主なる神を求めなければなりません。私たちがクリスマスのお祝いするのは、クリスマスにお生まれになられたイエスこそが、真実の光だからです（ヨハネ一章四〜五a節）。神は私たちを愛し、救うために御子を人としてお送りくださいました（同三章一六節）。

しかし一番の問題は、誰一人、光としての御子を理解できないことです（一章五b節）。世に属する人々は、自らの罪の故に、自らの欲望を求め続け、今の時の快樂を求め、御言葉によって示された光を理解することができません。アダムの犯した罪は、彼から生まれ来る私たちにまで及んでいます。私たちは体全体が全的に墮落しており、まったく神の真理を受け入れることができません。自らの罪の刑罰としての死を避けて通ることができません。

## II 神の選び

それでもなお主は私たち人間を愛してください、私たちが救いに導いてくださいたいです。救いは神の一方的な憐れみ・恵みです。そしてパウロの語った言葉を私たちは心に留めなければなりません（ローマ九章一四〜一六節、二〇〜二四節）。

つまり私たちは、主の御前に罪人であり、罪の刑罰としての死を避けて通ることのできない存在であること、さらに私たちが、創造主である神の被造物であり、私たちは創造主である神の御意志に従って生きる時に、神の恵みの中にあり、主の御意志に背いた所で、神の恵みや喜びを伴って歩むことはできません。

## III 聖霊の働き

では主なる神は、救おうとしてくださっている私たちに何を御与えくださったのでしょうか？ 私たちを世から選び出し、御名を現してくださいました（六節）。「御名」とは、神の名・神の本質・実態です。つまり「キリストこそが真の創造主であり救い主である」という真実が私たちに示されました。

これはただ知識として知ったものではありません。「彼らは御言葉を守りました。……今、彼らは知っています」（六節）。「守る」、「知る」とは、語られた御言葉により、神の本質を知識として知り、神を神として畏れ敬い、御言葉にひれ伏す、御言葉に聞き従うことです。さらには神がどの様なお方であるか知ろうとすることです。それが信仰となり、礼拝に与る者となります。聖書を読むこと、教理を学ぶこと、祈ることへとつながります。

(八節)。

これは主なる神が、聖霊をとおして私たちに働きかけ、頑なな石のような心の扉を開いてくださった結果です。主なる神が私たち一人ひとりをお選びくださり、心の扉を開いてくださった。父なる神の救いのご計画にある私たちが、御子のものとされました。そして、キリストがこれから成し遂げられる十字架に私たちがつながることにより、私たちは全的墮落した状態から、キリストの十字架の刑罰により罪が取り除かれ、義と認められ、神の子とされ、神の聖さが与えられています。

#### IV 伝道

では「神はある者を救い、ある者を滅ぼす不公平なお方だ」と語る場合、あなたはどこかの立場に立ってこの言葉を発しているでしょうか。主の偉いなるご計画の中に私たちは生きており、傍観者ではありません。「私は救われたい。神の永遠の生命に与りたい」と思うのであれば、信じればよいのです。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」(使徒一六章三一節)。神のご計画は、私たちの意志を無視して起こるものではなく、主は聖霊を通して私たちに働きかけ、私たちは意志をもって行動します。また「救われぬ方が可哀想だ」と語られる場合、自らが救われた喜びに満たされて、彼らに福音を伝え、救いの喜びを証しすればよいのです。私たちが伝道することによって、神を信じるようになった人は、彼らもまた神の選びに入れられていたことを、私たちは結果として知ることができます。

最後まで主なる神を信じることなく拒否し続ける者は、主の選びにはなく、結果として自らの罪の故に滅びに至ります。しかしこれは最終的なことであり、主は神の選びの民一人ひとりに最も相応しい時を定め、神を受け入れ、信じるように導いてくださいます。だから、私たちが福音を宣べ伝え、証しすることが求められています。しかし、福音を伝えることも受け入れず、信じない人に、「彼は選ばれていない」と安易に結論づけるのは不信仰です。私たちが時が良くても悪くても、自らの救いの感謝と信仰をもって、福音を宣べ伝えることが求められています。

えることが求められています。

#### 「神に属する者」

ヨハネによる福音書一七章一一〜一九節

二〇一一年一月一日

#### 序

私たちキリスト者は、神に属する者です。しかしこれは神と私が一对一の関係でつながっているわけではありません。キリスト者それぞれが神からの賜物を得て、神と教会に仕え、キリスト者相互の交わり(信仰共同体)が与えられています。キリスト者相互に一致、つまりハーモニーが求められています。キリスト者の一致は神の国に向かうことによる一致です(ウエストミンスター小教理問一)。向かう方向と目的が異なれば一致はありません。

#### I 一つとなる

主は御父・御子・御霊なる三つの位格を持ちますが、なおも一人の神です(一一節・わたしたち)。そして御父・御子・御霊なる三位一体なる神は、永遠・無限・不変の霊であり、互いに愛によって一つであり、完全なる一致があります(同小教理問四)。

三位一体なる神が一つであるように、主イエスは私たちキリスト者が一つとなるように求めています。主は私たち人間を「我々にかたどり、我々に似せて、人を造」られたのであり(創世記一章二六節)、「その鼻に命の息を吹き入れられました(同二章七節)」。創造された時、人は一つの思い、つまり創造主を誉め称えて礼拝し、世を治める者として一致していました。

#### II 罪の故に分裂を繰り返す教会

しかし人に罪が混入した結果、神から離れ、己の欲望のままに生き、死を担い、バラバラとなりました。現在、キリスト教会であっても完全に一致することはできません。教派

に別れ、同じ改革派教会内であっても、教会間に違いがあります。それは、主によって救いに導かれても、私たちはなおも罪人であり、救いの喜びに生きようとしても、なおも自らの思いで解釈してしまうからであり、それぞれが自己中心となるからです。

主イエスの弟子たちはどうだったでしょう？ 主イエスの弟子たちも主イエスの教えから離れ、一致することはできませんでした。弟子たちが誤ったことを語れば主イエスが誤りを正してください、誤ったことを行えば、主イエスが正し導いてくださいました。このようにして弟子たちは、キリストにあつて一つとされていきました。しかし聖霊降臨を迎える時、彼らは一つとなつていきました（使徒二章一、二節）。神に属する者としてキリスト者が一つとなるためには、自我を捨て、すべてを主（聖霊）に委ね、主によって語られる御言葉に聞かなければなりません。一人ひとりが自我から離れ、主に委ねることにより、主の導きに従うことによる一致が与えられます。私たちは聖書を読み続けることにより、自らの罪を悔い改め、主への信仰が増し加えられ、主の命令に聞き従うものとされます。

この時私たちの信仰観が問われます。ルターは「自分はいかに救われるか」から宗教改革を始めました。つまり信仰を考える時、出発点は自分にあります。しかしこの時、各々の神観が異なれば、一致にズレが生じてきます。私たち改革派教会では、神の創造の秩序に生き、神の国の完成に向かう歴史に自らを捉えます。つまり出発点は神であり、神はどのようなお方であるか、神は私たちをどのように救うかに導いてくださるのか……の聖書解釈の一致が重要となってきます。聖書を正しく解釈することにより、誤った聖書解釈を除き、教会は一致することができ、それを信仰告白によって表明します。ですから教会が信仰を告白し、信仰告白から生じる教理を学び続けることは、教会が一致し、神の国に向かって私たちが歩んでいくために、非常に重要なことです。

### III 終末における宣教

主イエスは、キリスト者を神に属する者としませんが、しかしまだ神を知らない人たちをすぐに裁くことはしません。毒麦の中に良い麦が混入しているからです（マタイ一三章二

四、三〇節、三六、四三節）。毒麦と良い麦が分けられる収穫の時を待たなければなりません。だから伝道が求められます。福音を伝える時、神の民でなければ、最終的に主の御言葉が伝えられてもそれを憎み（一四節）、神の民と世に属する者とが分けられていきま

す。しかしそれは最後の最後まで分からないため、福音宣教を絶え間なく行うことが求められています。だからこそ主イエスは、キリスト者を悪い者から守られるように祈ってください（一五節）。両者の間に衝突が生じ、迫害となるからです。迫害は福音宣教を行う上で避けて通ることができません。この時キリスト者は、衝突を避けようとして妥協するのですか？ そうではありません。何でもかんでも衝突すれば良いとは語りません。主から託された知恵により、衝突が回避できる所は回避すべきです。

しかし私たちが第一にすべきことは、主の御言葉に聞き、主の御意志を知り、一つとなつて主の真理を貫くことです。この時、世に属する人々は、自らの罪が示され、主への信仰へと導かれていきます。これが伝道です。主が私たちを支配しておられ、私たちに罪の死から救い出してください、くださった大いなる恵みの中にあることを確認しつつ、救いの感謝と喜びをもって、私たちが主の御言葉に聞き従った生活を行い、主の御前にも人々の前でも、遜り、証しの生活を送る時、宣教の業が成し遂げられていきます。そして、一教会・教派の枠を超えて、超教派（エキュメニズム）における一致が成し遂げられていく時、福音宣教に力が増し加えられていきます。日本において福音宣教が広まっていくためには、教会自身が御言葉によって変えられ続けることが求められています。

## I 主イエスの祈り

主イエスの祈りは、最初、父なる神に対して向けられ（一〜五節）、次に一人の弟子たちに向けられました（六〜一九節）。最後に、弟子たちによって宣教され、キリスト者へとされる人たち、つまり私たちに向けられています。

キリストの御業は十字架の贖いだけではありません。キリストは私たちのために祈ってくださいています。それもこの時ばかりではなく、天に昇られ、父なる神の右に座しておられる今なお、私たちのために執り成しの祈りを捧げ続けてくださっています（参照・ウエストミンスター大教理問五五）。それは、まだ神を知らない人たちが、御霊の働きにより、心動かされ、神の御前に、教会へと促されていくためにもです。

## II 一つとなる

このキリストの執り成しは、神に属する者、つまり神のご計画によって救われる者、これから神によつて呼び集められるすべてのキリスト者に対しての祈りです。キリストの祈りの目的は、私たちが神に属する者が一つとなることです。

しかしクリスチャンが集まれば、一つとなれるかと言えば、そうではありません。日本基督教団の例に見ます。日本基督教団は、一九四一年（昭和一六年）に日本政府によってキリスト教会は一つであるべきであるとの命令により、プロテスタント教会三三教派が合同して生まれました。当時の教会は、「教会が一つであることは素晴らしいことである。神の摂理である」と諸手を挙げて喜びました。しかしここに大きな問題が二つありました。一つは、為政者の命令に従って教会が行動したことです。第二は、神の御言葉による一致があつて行動したのではなく、信仰の違いにより別々の教派となつていた者たちが呉越同舟の如く一つとなつたことです。これは主イエスの祈りとは逆であり、一つになることはできません。

そのため日本キリスト改革派教会は、戦後の一九四六年に教会が信仰告白において一つになることを目的に、日本基督教団を離脱しました。主がお語りになる聖書に基づく信仰

による一致を求めた故です。三位一体なる神が一つであるように、キリスト者も一つとならなければなりません（二二〜二三節）。そして、キリスト者はキリストと一つとなり、御父・御子・御霊なる神と一つとなることが求められています。それも「完全に」です。つまり私たちは人間的な一致を求めてもダメです。三位一体なる神との一致を探らなければなりません。そのために主は御言葉の聖書をお与えくださり、御言葉への聴従を求めます。そして御言葉による信仰の一致を確認できれば、信仰を告白します。つまり教会は、聖書を解釈し、信仰告白で一致することにより、はじめて一つとなることができます。

この時、私たち一人ひとりの信仰、信仰に生きる私たちの生活が問われます。キリストが私たち一人ひとりのために執り成しの祈りを献げてくださったように、私たちは、主を日々愛し、主を礼拝し、主の御言葉に聞くこと、そして主が一つにしてくださいる教会、つまり兄弟姉妹、家族のことを愛し、敬い、仕えていくことが求められています。

## III 神の民として生きる

そして教会が一つとなるための中心に神の栄光があります。神は、御自身の持つおられる栄光を、御言葉をとおして私たちにお示しく下さいました。つまり食べること、飲むこと、人と話し合う時…、私たちの日々の生活の中のちよつとしたことを行う時にも、神の栄光に適っているか、隣人を愛する者としての行為・言葉となつているかを確認して、生きることが求められています。日々の生活とかけ離れた所において信仰の一致はありません。罪に汚れ、滅び行く私たちに、キリストは栄光を携えてきてくださいました。だからこそキリスト者が、栄光を讃えようとする時、それは主が持つておられる栄光を写し出すことでしか表現できません。そのため私たちは、主を知り、主の私たちに對する愛を知らなければなりません。そのため私たちは、御言葉に聞き続けなければなりません。

だからこそ私たちキリスト者は、神の救いに入れられ、神の子としての永遠の生命が与えられた者として、神に栄光を帰することに於いて、一つとなることが求められています（参照・ウエストミンスター大教理問一）。私たちが信仰によって神の栄光を讃える生活

が示され一つとなる時、私たちの日常が信仰の証しとなり、それが世の人々に伝えられていきます。これこそが伝道です。私たち自身が、救いの喜び、神の栄光を求めて信仰を貫くことにより、一つのキリスト教会が立てられ、真の伝道がなされていきます（二三b、二五〜二六節）。

## 「ナザレのイエス」 ヨハネによる福音書一八章一〜一一節

二〇一二年一月八日

### I 暗黒に向かわれる主イエス

御子イエス・キリストは、最後の晩餐と説教・祈りを終え、いよいよ逮捕され、十字架に架かられるためにゲツセマネに行かれます。ヨハネによる福音書はゲツセマネについて「園」とだけ語り、むしろその手前にある「キドロン谷」の名を記します。キドロン谷は、エルサレムの町のすぐ東側に南北にある谷ですが、「暗い・黒い・激しく悲しむ」と言った意味をもつ単語を語源とする地名です。ユダ王国のアサ王・ヒゼキヤ王・ヨシヤ王は、バアルやアシェラといった異教の像や祭具などを、このキドロン谷で廃棄しました（歴代誌下一五章一六節、三〇章一四節、列王記下二二章四〜六節）。つまり、ヨハネによる福音書がキドロンを記したことは、自らが世にある暗い部分・闇に入って行こうとされていること、さらに主イエスがサタンに対する勝利をもたらすことを意図しています。イスカリオテのユダが、主イエスを裏切るとは、福音書において繰り返し語られてきました（六章七〇〜七一節、一三章二節、三〇節）。主イエスは、ゲツセマネにおいて、毎日のように祈っており、弟子たちは皆知っていました。ユダが裏切ることを知っており、主イエスであれば、この時ゲツセマネを離れ、別の場所で祈ることもできました。しかし、主イエスはその場所、暗黒そのものである人々の前に向かわれます。

主イエスを逮捕するために集っていた人々は、ユダの他、ユダヤの宗教的な指導者たち、サンヘドリン（最高法院）を組織するユダヤの権力者たち、この地を統治していたローマの兵士たちです。群衆を恐れて、イエスを逮捕することのできなかったユダヤ人たちが、闇夜、イエスを逮捕するためにやって来ました。権力者たちは、黒を白とし、白を黒とします。そして自分たちの権力・武力をもって、人々に納得させ従わせていきます。

キリスト、そしてキリスト者を迫害するのは、時の為政者・偶像崇拜者が、自らの地位・権力を守るが故です。それは裏返せば、生きて働く主なる神の御力を恐れているからです。私たちがキリスト者として、彼らにとって都合なことがある故に虐げるのであり、私たちに生きて働く主が共におられる証拠です。私たちはどのような時にも信仰を貫くことが求められています。

### II ユダヤ人の前に出る主イエス

この時、主イエスは、逃げも隠れもしません。むしろ主イエスは積極的に彼らの前に立たれます（四節）。ヨハネによる福音書は他の福音書と異なり、神の御子である主イエス・キリストがどうされたのかを中心に書き記します。

ヨハネによる福音書はここが「園」であったことを記しています。人に罪が混入した時、人は園においてどのように行動したか？ アダムと女は隠れました（創世記三章八〜一〇節）。しかし第二のアダム、救い主イエス・キリストは、罪が支配している中、御自身を明らかにします。これこそ、勝利のしるしです。キリストは、園を罪・闇から解放し、神の民を、神の御支配、神の御国へと招いてくださいます。

### III 勝利を遂げられる主イエス

この時、彼らは「ナザレのイエス」を捜していることを語ります。彼らは、イエス御自身は、「逮捕を嫌い、逃げています」、「自分たちの前に自ら現れるはずなどない」との先入観を持っていました。だからこそ、主イエスが「わたしである」とお答えになった時、彼らは驚きます。第一に、まぎれもなくナザレのイエスが前に立っていることに対してで

す。そして第二に、「わたしである」と答えられたからです。これは出エジプト三章一四〇一五節において主なる神が御自身を名乗られた時の御名です。だからこそ彼らは、後ずさりしました。

しかし彼らはさらに、地に倒れます。これは、主の御力の表れです。彼らは武装していません。武器を持つことが、自らを守り、人々を支配することができる、信じていました。しかし武器もなにも持たずに、逮捕され、十字架に向かおうとされている主イエスが、言葉を発せられ、神御自身であることを示されることにより、人々は地に倒れ、ひれ伏さなければなりません。まさにキリストの逮捕と十字架は、敗北者の姿ではなく、勝利者としてヨハネは書き記します。そして主イエス・キリストは、率先して自ら十字架に架かられることにより、イエス・キリストを救い主と信じるすべての者に対する罪からの勝利としての救いを成し遂げてくださいました。主イエス・キリストは、十字架の死の後、三日目の朝に復活を遂げ、天に昇られました。そして、罪に勝利を遂げられた救い主は、今、私たちの救いのために、執り成し、祈り続けてくださっています。

## 「剣を抜く愚かさ」

ヨハネによる福音書一八章一〇一―一節

二〇一二年一月一日

### 序

ナザレのイエスを逮捕するために捜していたユダヤ人たちの前で、主イエスは「わたしはある」（エゴー・エミイ）と語られました。この時彼らは、ナザレのイエス本人が目の前にいた驚きと、主がモーセに語られた主の御名を名乗られたことにより後ずさりし、主の御力により地に倒れます。つまり主イエスの逮捕は、敗北ではなく、罪と死に対する勝利であり、主イエス御自身が進んで逮捕され、十字架の死へと向かわれます。

### I 弟子たちを思いやる主イエス

主イエスは「わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい」と語られます（八節）。この時、使徒ペトロは大祭司の手下を剣で切りつけます。イエスが逮捕される時、ペトロや他の弟子たちも、逮捕されてもまったく不思議ではない状態でした。

しかしユダヤ人たちは、弟子たちを逮捕せず、主イエスのみを逮捕します。聖書はその理由を記しません。最初からイエスのみを逮捕することとなっていたのかもしれない。もしくは主イエスの語られた言葉「わたしである」で神の御力が示され、彼らは主イエスが語られたこの言葉に聞き従う者となっていたのかもしれない。ただ主イエスはお一人で十字架に向かわれたのであり、最後まで弟子たちを愛され、守られたことは確かです。そして、十字架の死と復活を遂げ、天に昇られた主イエスは、今なお、神の子であるキリスト者すべてを愛することなく愛してくださっています。だからこそ、私たちは、主の御前に祈ることができるのであり、私たちは絶えられないような苦しみに捨て置かれることはありません（I コリント一〇章一三節）。

### II 信仰を告白するとは

一方、弟子の一人ペトロは、剣を持っており、それで大祭司の手下を切り付けます（一〇節）。逮捕されていく主イエスを助け、主イエスを逃がそうとしました。ペトロを初め弟子たちは、先生である主イエスを守りたい、守らねばならない気持ちには強かつたはずで、す。主イエスがこれから歩もうとされている十字架と救いの御業を弟子たちは何一つ理解していないことがここで改めて明らかにされました。

ペトロは主イエスの御前で信仰を告白していました（マタイ一六章一六節）。また主イエスによって自らの裏切りが予告された時も、それを否定し、主イエスの弟子として歩むことを告白していました（マタイ二六章三三、三五節）。

神を信じるとは、口で告白することですが、それで終わりではありません。神を主人とする、僕（奴隷）となることです。現代では奴隷制度はほぼなくなりましたが、しかし企



業に勤めておられる方などは会社の命令に対して服従が求められます。それに反すること  
をすれば辞職が求められます。キリスト者が主の僕（奴隸）であれば、主に絶対服従が求  
められます。主イエスはペトロや弟子たちを愛し、最後まで守ってくださったお方であり、  
私たちをも守ってくださった神です。そのお方が求められる命令は、御自身のエゴではあり  
ません。私たちを罪から守り、私たちを救い、神の国に導くために命じておられます。親  
の子に対する愛、それが主なる神にも、ペトロや私たちにも注がれています。

### III 信仰に生きるとは

ペトロは、主イエスをメシアとして信じながらも、この世の原理において行動して剣を  
抜き、神の原理・救いの秩序をまったく理解していませんでした。

この時、ペトロに求められた行動は何でしょうか？ 主イエスはすでに迫害を予告され  
ていました（一五章一八、二七節）。キリストを信じ、キリストに属する者は、世には属  
していません。世との衝突は避けられません。迫害に備えること、主の霊に委ねて御言葉  
に聞き、祈り続けることが求められています（参照・エフェソ六章）。私たちの生きる  
目的は、父なる神の御許に行き神の永遠の祝福に導かれることです（ヨハネ一四章六、七  
節）。それは地上にあっても、神の恵みに生きることです。ここに私たちの希望も喜びも  
あります。

私たちは、今日も、神によって導き招かれて、神の御前で礼拝を献げています。神を礼  
拝し続け、信仰生活が続けることは、本当の恵みであり、喜びです。しかし同時に、私た  
ちはペトロと同じ失敗を繰り返してはなりません。信仰生活・礼拝生活においてマンネリ  
化が起こり、御言葉に驚きがなくなる時、私たちは信仰の歩みから離れ、世の人々に同化  
します。主の御言葉に聞くことにより、罪の悔い改めと信仰が新たにされて行くことが求

められます。御言葉に聞き、主の御計画・御意志を知り、理解し、主に祈り、主に委ねて  
信仰生活を送ることが求められています。

## 「民の身代わりの死」

ヨハネによる福音書一八章一二、一四節

二〇一二年一月二十九日

### 序

主イエスの十字架の死は、私たちキリストにつながる者の救いのため、私たちの罪の贖  
いのためであることを、私たちは信じています。主イエスは私たちの罪の刑罰のために、  
生け贄として献げられました。

### I 主に仕える働き人としての祭司

旧約の時代、主はイスラエルに生け贄を献げることが求められました（参照・レビ一  
五章）。そして神の祭壇において奉仕を行うのは祭司の務めでした。つまり祭司は、主の  
御前に出て、民の罪を贖う儀式を司ることが求められ、聖なる者の務めを行いました。特  
に大祭司は、年に一度、至聖所に入ることが許される唯一の人物であり、神による聖めが  
示された特別な職務として与えられていました。ですから、大祭司・祭司・そしてレビ人  
は、主からの特別な召しが与えられ、モーセの兄アロンとその子孫に引き継がれました。

### II 主イエスの時代の大祭司

ところが、主イエスの時代の大祭司はどうだったのでしょうか？ 「その年の大祭司はカイ  
アフア」と記されています（一三節）。本来、大祭司はアロンの家系ツァドクの世襲であ  
り、終身制でした。年毎に交代する職務ではありません。毎年交代したのは、ヘロデ王が  
自らの権力を人々に知らしめる目的・政治的戦略において変更させたことによりです。ヘ  
ロデ王は、政治的に利用し、政治権力が教会（宗教）を利用したのです。

また大祭司は、ユダヤの最高法院（祭司長、律法学者、長老からなる・マタイ二七章四一節、マルコ一章二七節、一四章四三節、五三節、一五章一節、ルカ二二章六六節）の議長です。ですから、大祭司は、ローマと交渉することも求められました。従って大祭司は、一方はヘロデ王の顔色を見ながらも、もう一方、政治的・宗教的にイスラエルでの権力を握っていた職務者でした。

また逮捕された主イエスが連れて行かれたのは、大祭司カイアファではなく、しゅうとであり、過去において大祭司を務めていたアンナスでした。つまり実際にはアンナスが権力を持っており、最高法院を支配していました。

つまり、本来主なる神の御前に立ち、神と民の仲保者として、いけにえの儀式を司る大祭司が、政治的に利用されており、自らも政治的・宗教的権力者でもありました。しかも実質的にその権力の座にあったのは、大祭司ではなく、アンナスでした。ここには主の仕え人としての姿を見ることがなく、神の存在を無視した所において世的な権力が幅を利かせている状態に陥っていました。

### III 大祭司イエス・キリスト

こうした状況の中、主イエスは逮捕され十字架に架けられ、いけにえとなつていきます。旧約の時代、いけにえとして献げられたのは動物でしたが、繰り返し行うことが求められました。実際には、罪の刑罰を動物において行うことはできず、真の神の御子メシアであるイエス・キリストのみが、人の罪の贖いを成し遂げることがおできになります。つまり旧約の時代、動物のいけにえを続けたのは、やがて来られる救い主の生け贄を覚えつつ、陰に過ぎませんでした。しかし、真の光としての御子が来られ、ご自身が生け贄として十字架に架けられました。このイエス・キリストの十字架の死により、旧約の民、新約に生きる私たち、キリストにつながるすべての神の民の罪の贖いは、完成しました。そのため新約に生きる私たちは、改めて罪の贖いを動物のいけにえに求める必要はなく、イエス・キリストの十字架において罪に贖いが成し遂げられたことを覚えて感謝し、私たちは主の

晩餐の礼典、つまり聖餐式で罪の贖いが完成したことを確認します。

では、大祭司が世的に腐敗した中、主イエスが十字架にいけにえとして献げられる時、実質的に祭司としての務めは誰が担ったのでしょうか？ この時私たちは、主イエスは自ら逮捕され、十字架の道を歩まれたことを忘れてはなりません。主イエスは、弟子たちに對して、繰り返し、逮捕され、十字架の死と復活を遂げられることを語ってこられました。私たちは、最後の晩餐における主イエスの説教を聞いてきました。

真の救いを成し遂げるため、ご自身を生け贄として献げられる主イエスご自身が、まさに大祭司として、神と神の民であるキリスト者との間に立つ仲保者として、その働きを成し遂げてくださいました（参照・ウエストミンスター小教理問答問二三、問二五）。

今の時代も、為政者・権力者は、宗教を支配し、自らの権力を保持しようと働きかけます。教会は、常にその危険にさらされています。しかし、父・子・御霊なる三位一体なる神によって召しを受けた牧師は、主のお語りになる御言葉の聖書を通して、語り続けます。神の御言葉にこそ、真理があり、救いがあります。

だからこそ私たちは、すべてを支配し、今も生きて働く主なる神の御前に、信仰を告白し、主の御言葉に聞き従うことが、今改めて求められています。世に流されれば、キリストの十字架もまた光り輝くことなく、曇り、霞んでしまいます。自らの思いで行動しようとすれば、権力者からの脅しに屈してしまいます。力の支配に屈することなく、御霊の支配、神の御言葉に支配に満たされ、光り輝くイエス・キリストによって与えられた救いの希望に生き続けることが求められています。

「あなたもイエスの弟子か？」

ヨハネによる福音書一八章一五〜一八節

二〇一二年二月五日

主イエスは逮捕されました。このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまします（マタイ二六章五六節）。神の御子キリストが逮捕されたことにより、弟子たちは、神の救いよりも、目の前にある武器・権威者に恐れを抱きます。

### I もう一人の弟子

それでもなお弟子たちは、先生であるイエスがどのようなか、気になって仕方ありません。そのためペトロともう一人の弟子は、逮捕されたイエスの後を追います。もう一人の弟子の方は、大祭司の知り合いました（一五節）。これは非常に興味深いことです。この弟子とは誰か？ なぜこの弟子は大祭司と知り合うことができたのか？

興味深く、推論しようと思えば、いくらでも行うことができることです。小説は行間を読む楽しさがあります。しかし、私たちが聖書を読む時、聖書が語らないことは私たちが救われるためには関わりのないことであり、私たちは知る必要がないことです。

### II 不意を突かれる危険

この弟子は大祭司の知り合だったので、イエスと一緒に大祭司の屋敷の中庭に入ります、ペトロは門の外に立っていました。最初からもう一人の弟子の知り合いとして紹介され、一緒に大祭司の屋敷の中庭に入ることも可能だったことでしょう。しかし最初、ペトロはそのようにはしませんでした。躊躇・戸惑いがあったと思われます。主イエスの言葉（一三章三八節）が、ペトロの脳裏にあったのかもしれない。大祭司の屋敷に入ること、危険が伴うからです。

しかしもう一人の弟子は、出て来て門番の女に話し、ペトロを中に入れます。彼はペトロに対する親切心から行動したのでしょう。しかしペトロにとっては、この誘いが罪の誘惑でした。ペトロは不意を突かれ、考える間もなく行動します。考える間もなく行動することは、今まで危険に対して構えていたことを止めて、頭が真っ白の状態で行動することを意味します。

私たちが日々生活していく中で様々な誘いの声をかけられます。中にはオレオレ詐欺のように故意に人を騙そうとする誘いもあります。この弟子のように、故意ではない場合もあります。いずれにしろ私たちは、一つの行動を起こす時、一度考えてから、決断して行動することが求められます。それは祈りを持って行う信仰的な決断です。そのために、私たちは日頃から御言葉に聞き続け、祈り続けることが求められます。御言葉の養いに与っていることにより、私たちは、突然に判断が求められることが起きても、信仰的な判断を下すことができます。

### III 油断のもたらす危険

大祭司の屋敷の中庭に入ったペトロは、門番の女中から問いかけられます。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか」（一七節）。彼女にとっては当然の質問です。先に入ったもう一人の弟子は、主イエスの弟子であることを知っていたからです。

しかしペトロにとっては、彼女から問いかけは想定外の出来事でした。つまり、ペトロは主イエスが語られたことを心に留めており、ローマの兵士もしくはユダヤ人から問いただされることを念頭に置いていたかと思われます。ですからペトロが想定していた人たちが問いかけてきておれば、状況は違っていたことでしょう。しかし問いかけてきたのは門番の女中であり、ペトロにとっては想定外であり、油断していました。

私たちは信仰の武器を身につけなければなりません（エフェソ六章）。日頃から備えておかなければなりません。しかし同時に、身構えておらず、油断している時に何が起きて、私たちが適切に判断し行動することが求められます。こうした油断している時にも、信仰的な判断をするために、私たちは御言葉を蓄え、信仰的に行動することが求められます。しかし同時に限界があります。私たちは、どのような時にも信仰的に行動できると過信してはなりません。むしろ、自らの弱さ、罪深さを確認し、主の御前に信仰を告白すると同時に、こうした罪の悔い改めを行うことが求められています。

### IV 聖餐式の恵み

私たちはこの後、主の晩餐の恵みに満たされます。主イエス・キリストが、私たちの神、救い主であると教会において告白したキリスト者は、誰もが与えることができます。

この時、躓いたペトロも、主イエスは聖餐の礼典に招いてくださいました（二一章一五節）。主イエスは、同じ言葉を三度繰り返されます。そして主はペトロを主の晩餐に与るばかりか、教会の指導者としてお立てくださいます。罪を犯しても赦してください。主イエスがおられるからこそ、私たちは安心して日々、生活していくことができます。身構えずに済みます。そしてどのような時にも、信仰的な判断をもって、生活していくことが求められています。

罪の赦しと救いに感謝しつつ、聖餐に与り、今日から始まります一週の歩みを、救いの感謝を持ちつつ、主を証しする日々となりますように。

## 「公然と話す」

ヨハネによる福音書一八章一九〜二四節

二〇一二年二月一二日

### I 聖書の整合性

主イエスは逮捕され、大祭司のしゅうとアンナスの所に連れて来られました（一二、一三節）。

本来、祭司は主から託された職務であり、レビの家系ツアドクの子孫にのみに、終生与えられていた務めです。しかし当時、ユダヤの王ヘロデは、自らの権力を誇示するため、毎年、大祭司を任命していました。「大祭司」（一九節）は、この年の大祭司カイアフアのことか、以前の大祭司であり権力を握っていたアンナスであったかはつきりしません。ヨハネ福音書は、「アンナスは、イエスを縛ったまま、大祭司カイアフアのもとに送った」（二四節）と記すため、この時は、まだアンナスの家にと考えられるからです。

新共同訳聖書は、表題と共に並行聖書箇所を記します。他の三つの共観福音書は大祭司カイアフアの所での出来事が記されており、ヨハネもカイアフアの所であったと解釈します。これは解釈の違いです。聖書を読むだけでは確定できません。しかしヨハネは、最後の晩餐の出来事を、共観福音書では語られていない事柄ばかりを語っていることから考えると、ここでも共観福音書で記されていない事柄を記述し、共観福音書で記されていたことは、記していないとも考えられます。それが私の解釈です。

### II 公然と語られた主イエス

アンナスの前で、裁判（予備審問）を受けている主イエスですが、私たちの注目すべきことは、主イエスが「わたしは、世に向かつて公然と話した」とお語りなされたことです。主イエスは、権威を恐れることはされません。大祭司であるうが、権力者であるうが、語ることは語ります。主イエスは、この時までに必要なことはすべてお語りになってきていました。主イエスは、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」（マタイ二八章一九節）と語られ、伝道することが求められます。クリスチャン人口の少ない日本にあって、なおさら求められていることです。私たちの信仰を理解していただくことすら難しい問題です。昨日は「建国記念の日」でした。私たちキリスト者は、神話に基づくこの日を認めません。唯一の主なる神のみを信じるのであって、作られた神々を拝むことはせず、神社や天皇を崇拝することも致しません。天皇を崇拝する君が代を歌いません。信仰を貫くことは困難であり、信仰を貫くためには知恵も必要です。

しかし福音を隠しておいてはなりません。礼拝は、すべての方々に開放されています。今はホームページによって、世界の人たちに開かれています。主なる神は生きて働いておられ、私たちに生きる希望をお与えくださいます。苦しい時、信仰を貫くためにどのような対処すれば良いのか判らない時、祈れば良いのです。主は私たちの祈りを聞き届けてくださいます。だからこそ信仰を貫き、信仰を証しすることを求めておられます。

また信じているが、何を語れば良いのか判らないから語らないと言われる方もあるかと

思います。「主イエス・キリストが救い主」として信じていることを証しすれば良いのです。私たちは、人から信仰の有無が求められた時には、隠すことなく、積極的に語る事が求められています。

信じている内容を理解した上で、語ろうと思うのであれば、努力しなければなりません。判らなければ、学ぶ機会を作らなければなりません。家庭礼拝・個人礼拝が必要です。公的礼拝・集会の他にも、求められれば牧師は聖書を学ぶ機会は作ります。ともし火は、升の下ではなく、燭台の上に置かなければならないからです（マタイ五章一五〜一六節）。

### III 信仰を貫く喜びに生きる

私たちが、神の福音、そして真理を証しし続ける時、その事實は明るみに出ます。私たちの信仰を否定することは、誰にもできません。

しかしこの時、主なる神を理解できず、神の裁きをないがしろにする者は、信仰者の証しを拒絶します。主イエスが証言した時も、そばにいた下役はイエスを平手で打ちます。この時、主イエスは逮捕され、正式な裁判に臨もうとしている時です。一人の人間が裁判を受けている間は、正式な判決が下るまでは、勝手に裁かれることがあってはならず、下役の行った行為は、合法的なものではありません。福音を拒絶する人たちは、福音が証しされた時、感情的になり、秩序や法律などを無視して、武力を用いても、自らの意見を通そうといたします。これがキリストの裁判において起こったことであり、私たちの身に起こりうる問題です。

この時主イエスは、「何か悪いことをわたしと言ったのなら、その悪いところを証明しなさい。正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか」とお答えになります。迫害や信仰の弁明が求められる時、私たちは、感情的にならずに、相手の過ちを正し、福音を証し続けることが求められています。

私たちが信仰の闘いを貫くことは大変な労苦が伴います。しかし、私たちは主による救いを信じることによって、罪の赦しと永遠の生命が与えられています。キリストが十字架

の死に至るまで、従順に従われたように、キリストによる救いに入れられている私たちも、救いの希望をもって、信仰を証しする歩みが続けていくことが望まれています。

### 「引き返す勇氣を持って！」

ヨハネによる福音書一八章二五〜二七節

二〇一二年三月四日

### I 聖書はあなたに語りかける

今日の御言葉にはペトロの躓きが語られています。この記事は、多くのキリスト者が我がことの如くに思い、ペトロに対して親近感を持ちます。私たちが聖書を読む時、常にこの記事のように自らの生活と重ねて読むことができれば、親しみやすいことでしょう。しかし、イスラエルは日本とは異なり、時代背景も違うため、理解できないことも多いかと思えます。旧約聖書では特にそうです。なぜこのような所を読むことが求められるのかと思ふ箇所もあるでしょう。

聖書は神の言葉であり、場所・民族・時代を超えて、今、神の御前に立たされて私たちに對して、私たちが神による救いが必要であること、つまり私たちの罪の姿を明らかにし、神の恵みと救いを指し示し、その上で神が私たちに求められていること、私たちの祈り求めるべきこと、してはならないことを語ります。言い換えれば、聖書は、苦しみ、悲しみ、喜び、怒りを発する私たちに對して、神による救いを示してください。

私たちが聖書を読む時、時には、自分には関係がないと思われような罪が語られます。しかしここに人間の究極の罪があり、私たち自身も同じ立場に位置していることを忘れてはなりません。また、主の命令に對して、この時にも、はじめからこのようなことはできないと思つてしまうのではなく、主がなぜ、私たちにそのようなことを求められているのかを考えな

ければなりません。その上で、完全に守ることができないけれども、自らの罪、欠け、弱さを受け入れつつ、主の命令に倣うように努力しなければなりません。

## II ペトロの躓き

さて、今日与えられたペトロの躓きですが、自分もペトロのような失敗を犯してしまうと、笑いながら同調するだけではまったく意味がありません。

この出来事は、四福音書に記されています。重要な出来事であるからです。しかしヨハネによる福音書だけは、他の共観福音書とは異なり、この一連の出来事を二つに分けて記します。最初にペトロが主イエスを否定した時、非常に大きな壁があったのですが、とつさに嘘をつき、主イエスを知らないことを語ってしまいました。しかし今日のテキストではどうでしょうか？ ペトロは立って火にあたっていました。ペトロは裁判を受けている主イエスを眺めているユダヤ人の中に混じっていました。主イエスの弟子であることを隠して、自分はユダヤ人であることを語るようにです。

しかし火にあたることは同時に、ペトロの姿が人々に露わになることも意味します。ペトロはユダヤ人たちと同じように立っていました。エルサレムに住む人々からすれば、ペトリヤ出身のペトロは、明らかに田舎者でした。そして、主イエスと共に行っていることを知っている人にとっては、それが目立ちます。ペトロは隠しているようであつても、人々には明らかでした。

同様に、私たちのどのような小さな出来事も、主なる神の御前に何一つ隠すことはできません。天においてすべてが記録されています。それが私たちの罪の姿です。

ペトロは二度目、三度目と主イエスと共にいたことを打ち消します。初めはおとなしく「私は違う」と語りましたが、二度目はきつぱりと打ち消して「違う」と語り、三度目は、他の共観福音書の記述では、呪いの言葉さえ口にしながら（マルコ一四章七一節）、主イエスを強く打ち消します。最初は非常に意識します。だからこそ、それを超えないようにと歯止めがかかります。しかし次第に罪が習慣的になり、最後は良心が眠ってしまうが如

くに麻痺して、神を軽んじ、罪を犯すことに対して何の抵抗もなくなります。むしろ一つの嘘を隠すように、嘘を積み重ね、頑固になっていきます。

## III 神は私たちを救いの場に連れ戻してください

ここに私たちの持っている人間の罪の怖さがあります。ペトロの場合「嘘」だから、自分にもあり得ると思うのですが、それが人殺しとなれば、自分は絶対に行わないと語るでしょう。しかし戦争のような状況になれば、人を殺す者となります。

私たちは、一つの罪を犯した時、必ず主の御前に立ち、自らの罪を悔い改め、罪に対する思いをリセットしなければなりません。罪という大きな壁にしておかなければなりません。罪の刑罰は死です。だからこそ私たちは、常に引き返す勇氣を持つことが必要です。一つの罪を犯すことにより、たがが外れた如く、罪の上塗りをするからです。

ペトロは、三度目に主イエスを否定した時、鶏が鳴いた声を聞き、自らの罪を知ります。この時ペトロにとつては、鶏の声が雷鳴の如くに響いたことでしょう。しかしペトロが立ち返ることができたのは、主イエスの言葉と祈りの結果です（ルカ二二章三一〜三二節）。私たちは、なかなか自らの罪を受け入れ、引き返すことができません。分かっている、これ位は大丈夫だと自らがを緩めてしまいます。だからこそ、主は、主の日毎に、私たちを日々の生活から離れ、主の御前に立つように、礼拝に招いてくださいます。また毎日、家庭・個人で、主の御言葉に向き合うことが求められています。

## 「手を汚さずに逃げる者」

ヨハネによる福音書一八章二八〜三二節

二〇一二年三月一日

## 序

今日、三月一日を迎えました。昨年今日、大きく地が揺り動き、大きな波が生活を

なぎ倒していきました。そして放射能という目に見えない恐怖におびえる日々が今も続いています。その日を境に、日本社会は大きく変化を遂げました。そして今、人々は、何に価値を置くのか、非常に揺り動いています。

## I ユダヤ人

さて、逮捕された主イエスは、ローマの総督ポンティオ・ピラトの所に連れて行かれました。「人々」・「彼ら」とは、ユダヤ人である律法学者やファリサイ派の人々であり、ユダヤの最高法院を構成していた人々です。

ヨハネによる福音書は、大祭司の屋敷において行われた主イエスの取り調べに関して、ほとんど何も語りません。彼らは、なぜ主イエスをピラトの下に連れてきたのでしょうか。彼らは、主イエスを死刑にすることを願っていました。それはピラトが「どういう罪でこの男を訴えるのか」（二九節）と語ったことに対して、彼らは「この男が悪いことをしていなかったらあなたに引き渡しはしなかったでしょう」（三〇節）と語ります（参照・マタイ二六章六五〜六六節）。彼らの恨みの根源は、主イエスによって彼ら自身の生き方が否定されたからです。主イエスが奇跡を行い、人を引きつける話しをするだけであれば、彼らも主イエスを殺そうと思わなかったことでしょう。しかし主イエスは彼らの信仰、彼らの生き方そのものを否定しました。それは、彼らが律法に従って生きていると語りながらも、律法の与えられた意味をはき違え、また律法を変質して用いていたからです。十戒で代表される律法は、十戒の序文で明らかのように、イスラエルの救いは神が一方的にイスラエルを捉え救ってくださったことによるのであり、救われた感謝と喜びをもって、神の示す道を歩むものとして、また罪に陥らないように律法が与えられました。しかし彼らは、律法を守ることで人々を裁いていました。また自らの正しさを主張するために律法を曲げ、また返す刀で人々を裁いていました。

## II ユダヤ人たちの過ち

そうした人々が、主イエスを殺そうと、ピラトの所に連れてきました。彼らにとって、自分たちは正しいのであり、悪いのはイエスです。彼らは自分たちの正しさを主張するために、律法を守っていることを人々に示します。この時も、異邦人の所に行くことで汚れるとの律法を盾に、ローマの総督ピラトの屋敷に入ろうとしませんでした。自分たちは正しい者であり、主の過越の食事を行うことが大切であるとの主張です。確かに、異邦人の所に行くことによって汚れることは、ペトロも語っています（使徒一〇章二八節）。しかし彼らは、自分たちを否定する主イエスが憎く、主イエスを殺すことにのみ心が奪われています。そのため、小さな律法を守ろうと一生懸命なのですが、救い主を理解できないこと、さらに人を殺すことが大きな罪であることを理解できませんでした。つまり、主イエスがお語りになられている救いとは何か、信仰とは何かを、彼らは理解できませんでした。主イエスは、彼らを否定したのではなく、誤りを認め、修正し、悔い改めて主に立ち返ることを求めておられたのですが、彼らはそれを理解することができませんでした。彼らの状況は、主イエスの次の言葉によつて的確に語られています（マタイ七章三〜五節）。

彼らは律法の一つひとつに忠実であると言えば聞こえは良いですが、救いとは何かという大前提を無視して、小さな律法に忠実であろうとしており、本末転倒です。また彼らは、イエスを殺すという大きな出来事に関わるにも関わらず、自分たちが汚れるとの理由で、また自分たちには死刑にする権限がないとの理由で、すべてをピラトに丸投げします。つまり、根本的な信仰的な生き方が間違っているばかりか、自分たちで解決しなければならぬ問題すらも、他人に委ねてしまい、他人事にします。これが罪です。

私たちは今生きる目的は何かを取り戻すことが大切です。神を信じるとは何かという大前提を取り戻すことです。律法によつて自分たちの正しさを主張するのではなく、自然を支配し、命を支配しておられる主の御前に私たちが生きていくことを確認し、私たち自身の行い・言葉・心が、主の御前に正しいことか吟味することが求められています。自らの弱さ、罪を受け入れなければなりません。その上で、主がお示しくださる救いの恵みを知ることが求められています。律法を守り、良き行いによつて救われるではありません。

私たちは主の一方的な救いに入れられており、信じることによって救われます。主が約束してくださっていた救い主イエス・キリストはすでに与えられました。そして、私たちの救いは、主イエス・キリストの十字架の死と死からの復活をとおしてすでに成し遂げられています。

### III ピラト

一方、ローマの総督ピラトはどうでしょうか？彼はこの件に関わりたくありません（三一節、参照・マタイ二七章一八〜一九節）。主イエスの名声について、つまり奇跡を行い、病人を癒やされたこと、ラザロを死から甦らせたことなどは、彼の耳にも入っていたはずですが。そのためピラトは、主イエスに関わりたくないばかりか、罪を認めることができませんでした。「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」（ルカ二三章四節）とすら語り

ます。ピラトは、主イエスに対して死刑にする権限を持っている唯一の人間であり、同時に無罪を宣言する権威も持っていました。にもかかわらず、ピラトは、責任回避をしつつ（ルカ二七章二四節）、主イエスを死刑に処しました。ピラトは、神を畏れることなく、ユダヤ人の目を恐れたのです。ピラトは、ユダヤ人たちを統治することが求められていました。そのため、ユダヤ人の求めに反して主イエスを無罪とすることによって、自らの地位が奪われることを恐れたのです。しかし主イエスは私たちにお教えくださいます。「人々を恐れてはならない。体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」（マタイ一〇章二六節、二八節）。

主イエスを十字架に架けたことの責任は、ユダヤ人とピラトに帰せられます。しかし、他人の罪は指摘しつつ、自らの過ちを顧みない姿、自らの責任を逃れようとする姿、そして生きて働く主を顧みることなく、目の前の出来事を追い求める姿、それはまさに私たちに問いかけられている罪です。こうした私たちの行いこそが、キリストを十字架に架けたのです。

私たちは、今、生きるとは何かを問いかねなければなりません。主は私たちに今日も命をお与えくださっています。そしてそのお方が、私たちを救いに招き入れてくださっています。私たちが生きるとは、命をお与えくださっている主なる神を顧み、その栄光を讃えることです。命が与えられ、救われていることを喜んで生きることです。

三月一日、今年も、主なる神は、ここに集う一人ひとりに命をお与えくださっている恵みをお覚えいただきたいと思えます。

### 「イエスの属する国」

ヨハネによる福音書一八章三三〜三八節

二〇一二年三月一日

### I ピラトの質問

主イエス・キリストは、逮捕され、ローマの総督ポンティオ・ピラトに渡されました。ユダヤ人たちは、「この男は『ユダヤ人の王』と自称した」として訴えています（一九章二一節）。ユダヤを監督しているローマの皇帝をも恐れぬ反逆者として、ローマ総督によって裁きを受けることも正当性があるのだという主張です。しかしピラトは、「おまえがユダヤ人の王なのか」と問います。これは、ローマの主権の及ばない所での出来事、つまりユダヤの宗教的な指導者争いであって、ローマの統治に恐れを来たらす存在ではないとの解釈です。ピラトは主イエスの噂を聞いていました。そしてピラトはイエスに対して興味を示していました。またイエスが自分の権力の座を奪うような者ではないことを、ピラトは理解していました。だからこそピラトは、イエスを裁くことに対しては消極的でした。

### II イエスの逆質問

この時主イエスは、ピラトに逆質問します（三四節）。主イエスにとって大切なことは、



ピラトが、イエスをメシアとして信じ、信仰を告白し神の民として歩もうとしているか、否かです。後者としてユダヤ人の代弁者に過ぎない立場を主張するのであれば、彼はユダヤ人と同じ罪を負うことになります。一方、前者であれば、主イエスに対する信仰告白となるからです。

ここで主イエスの問いかけは、ピラトに向けられていると同時に、私たちに向けられています。つまり私たちは、主イエスの十字架を仰ぎ見る前に、私たちにどうしてイエス・キリストとはどういう存在かが、問われています。主イエスの十字架と私たちとは時代・場所・民族が異なります。得てして、別世界の他人事になってしまいます。他人事にしてしまふ、それは私たちの目の前でキリストの十字架があったとしても変わりないでしょう。マスコミと同様に騒ぐが、自分には無関係なことという態度をとります。

しかし、このキリストの十字架の御業は、私たちの救いのためでした。イエス・キリストを知ることなく、無関心であることは、ピラトと同じように、私たちに与えられた救い主を無視することです。使徒信条をは、「ポンティオ・ピラトによつて十字架に架けられ」と告白します。まさにこのお方を十字架に架けた者としての責任がピラトにあるように、私たちにもあることを理解しなければなりません。

### III イエスの国

ユダヤ人たちにとって問題は「イエスがユダヤ人の王」であるかどうかでした。彼らの理想としていたメシア、ユダヤ人の王は、ユダヤの政治的・霊的指導者であり、ローマ帝国の支配から解放する王でした。しかしイエスは違いました。彼らの希望からはかけ離れており、主イエスは彼らを批判し、その生き方すら否定されました。

主イエスは御自身を示されます(三六節)。主イエスは、肉をとり人となりました。つまり主イエスは、元々この世に属するお方ではなく、真の神です。この世、世界をお創りになられ、世界を治めておられるお方です。だからこそ私たちは、イエス・キリストを真の神でありつつ、真の人となられた二性一人格のお方として信仰を告白します。従つて主

イエスの語られる国は、この世の権力や軍勢力・経済力によつて支配される国ではなく、地にではなく、天に起源を持つ国、霊的な国、信条・意思・良心に関わる国、この世の国々が干渉することのできない国です。それが神の国、天国です。

主イエスは天に属する者です。だからこそ十字架の死において、一時的に肉の体は葬られ陰府に下られたとしても、天に属する者として魂は天にあり、肉の死に打ち勝ち、死から復活することができたのです。

「政教分離」と言う言葉があります。「宗教が政治に関わってはならない」と解釈されますが、事実は逆です。「政治が宗教に口出ししてはならないのです」。それがここで記されていることです。この世の支配は、霊的な神の国には及びません。むしろ主の御支配がこの世に及んでいます。そのためこの世の為政者は主の御前に正しいことを行うことが求められ、教会は見張りの権能により注意・勧告・抗議を行うのです(参照・ウエストミンスター信仰告白第二三章一節)。

私たちが、イエス・キリストを救い主として信じていることができるのは、まさにキリストが天に属する者であり、私たちの命を司っておられるからです(マタイ一〇章二八節)。「そして、キリストは、王の王、主の主であられます(参照・I テモテ六章一五〜一六節、黙示録一七章一四節)。

「主イエスを見よ！」

ヨハネによる福音書一八章三八〜一九章一六節

二〇一二年四月一日

### 序

受難週、私たちは、御子イエスキリストの十字架を仰ぎ見つつ、その意味を考えながら、一週の時を歩みます。

## I ユダヤ人の罪

ローマの総督ポンティオ・ピラトは、主イエスの死刑に消極的な思いでした（一八章三八節）。そのためピラトは、ユダヤ人たちを納得させるために、イエスを鞭を打ち（一節）、懲らしめを行っていることを見せつけます。その上で、茨の冠と紫の服を着せ（五節）、ぼろぼろの王、つまり偽りの王であることを人々に見せつけます。

その上でピラトは「見よ、この男だ」（五節）と語ります。ユダヤ人たちはなおも「十字架につける。十字架につける」（六節）、「殺せ。殺せ。十字架につける」（一五節）と叫び続けます。彼らは律法を用いて、イエスを告発します（七節）。レビ二四章一五、一六節による告発です。一見、彼らの主張に正当性があるように思えます。しかし彼らは、主イエスから、彼ら自身が大事にしていた律法の教えをないがしろにされ、人々の前で恥をかかされていたため、イエスが邪魔になり、十字架で殺そうと躍起になっています。

律法は大切ですが。しかし律法は、救いに導くための導き手に過ぎません。救い・福音が優先されなければなりません。目の前におられる方こそ、救い主イエス・キリストです。福音を見ずして、律法に固執するところに彼らの罪があります。救いを求めると語りながらも、救いを見ず、利己主義となっています。

私たちキリスト者は、このユダヤ人たちの姿を他人事として傍聴してはなりません。私たちは信じることによって救われることを知っており、信じております。ここに福音があります。確かにそうです。しかし信じて、毎週礼拝に出席していれば良いのか。そこに律法主義的なことがないか考えなければなりません。律法は、福音を指し示すものとして、私たち自身に罪を指し示し、救いを求める必要を語り、主の御前に立たせる働きがあります。その上で、キリストによる救いにある者として、律法に従わなければなりません。救いの喜びに生きる者として、喜んで律法に聞き従うのです。そのために、私たちは、主の御前に立ち、主がお語りになる御言葉に耳を傾けなければなりません。聞くことは、それに集中することです。他の用事の片手間に御言葉を聞くことはできません。御言葉を聞け

ば、そのままの状態ではあり得ず、自らの罪を悔い改め、心を改め、行動します。

## II 沈黙

一方この時、弟子たちの姿はまったくありません。武装した兵士たち、権力を有しているユダヤ人たちの前に、声を出さず、できず、できませんでした。弟子たちは、主イエスを積極的に十字架に架けるために声を上げることができませんでした。主イエスを十字架に架けることに対して反対することもできず、ユダヤ人たちと同じ立場に身を置いていました。

私たちも主イエスを見なければなりません。「自分たちはユダヤ人とは違う」と語りつつ、傍観者であることは、弟子たちと同じように主イエスを十字架に架けた責任が問われます。主イエスは、ユダヤ人たちの語るように、偽物の王なのか？ それとも、真の王なのか？ 私たちが、主イエスが真の救い主であると信じるならば、武装しているローマ兵、権力を握っているユダヤ人たちの前で、このことを証しすることが求められます。それが真の信仰です。

「私はそれほど強くない、信仰を貫けない」という人もいます。弟子たち同様、私たちは自らの弱さ、主イエスに従い得ない罪を、直視しなければなりません。主イエスの十字架は、主イエスを信じつつも従い得ない私たちの罪を赦し、神の子として迎え入れてくださるためでありました。鞭打たれ傷跡が残り、茨の冠と紫の服をまとっている「神の子と自称している」と揶揄されながら十字架に架かっているキリストこそが、私たちの罪の刑罰の姿です。私たちの無関心こそが、キリストを十字架に架けた罪です。

## III 救いに生きる希望

十字架に架かられたキリストは、死を遂げられた後、復活し、天に昇られました。そのお方がお語りくださいます（黙示録二二章一、二、一三節、二一章三、八節）。私たちの救いの希望は、この神の国にあります。肉の死を恐れる必要はありません。権力・人の目におびえる必要がありません。キリストにこそ希望があるからです。ピラトが語るように、救いをもたらさずしてくださったキリストを、私たちは見なければなりません。キリストの御

言葉に聞かなければなりません。すでに私たちの救いは成し遂げられました。そのことを、私たちは聖餐の礼典において確認します。恐れ、おびえることなく、他のことに気をとられることなく、福音であるキリストの御前に立ち、キリストの御言葉に聞き従っていきましよう。

## 「知る者の責任」

ヨハネによる福音書一八章三八節〜一九章一六節

二〇一二年四月四日

主イエスは、ピラトの下で裁判を受けています。ピラトはローマ皇帝から派遣された総督であり、この地における最終的な責任が委ねられています。そして、この地において犯罪者を死刑にする権威を唯一与えられていたのが、ローマの総督ピラトでした。

ピラトとしては、「わたしはこの男に罪を見いだせない」（六節）と語ることでより、主イエスを死刑に処したくないとの思いもあつたことでしょう。そのためピラトは、イエスが自己弁護することにより、無罪にする手立てが出てくるのではないかとの思いで、何もお語りにならないイエスに質問します。「わたしに答えないのか。お前を釈放する権限も、十字架につける権限も、このわたしにあることを知らないのか」（一〇節）。

この時、主イエスにとつて、十字架を回避する選択はありませんでした。そのため、主イエスは自己弁護されることはありません。主イエスがピラトに答えられたことは、ご自身を十字架に架ける者の責任についてです。まずはピラトに対してです。ピラトは、ローマ皇帝から権能を与えられたと信じています。しかし私たちは、主なる神がすべてを支配しておられることを忘れてはなりません。つまり、ローマ皇帝であっても、主なる神の権能の下に置かれており、ローマ皇帝の権能は、主の定められた律法の下においてのみ有効

です。ウエストミンスター信仰告白二三章一節では、次のように告白します。第二三章国家的為政者について「一 全世界の至上の主であり王である神は、御自身の栄光と公共善のため、御自身の下にあつて、国民の上に立つ、国家的為政者を定めておられ、そしてこの目的のため、善良な者は守り励まし、悪を行う者は処罰するように、国家的為政者に剣の権能を帯びさせておられる」。つまり、主イエスがお語りになられたことは、ピラトもまた、主が死刑にする権能をお与えになったのであり、人ひとり処刑にする、救い主であるイエス・キリストを処刑することに対して、主なる神の御前に責任が問われることとなることを語ります。このことは、私たちが使徒信条において毎回告白する言葉においても明らかです。「主は聖霊によりて宿り、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府に下り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて生ける者と死ねる者とをさばきたまわん」。

しかし、主イエスは同時に「わたしをあなたに引き渡した者の罪はもつと重い」（一一節）という言葉を付け加えます。これは、今、主イエスを十字架に架けることを要求しているユダヤ人たちの責任を語っています。つまり為政者の責任は、一般恩寵に基づく責任であり、主が直接御言葉や預言を通して語り、伝えたことではなく、天地万物の創造主の御支配の下にある者として与えられている責任のことを語ってきました。しかしユダヤ人に対しては、アブラハムの時代から、選びの民として、主がアブラハムをはじめとする族长や預言者たちをお立てになり、ユダヤの人々は、彼らをとおして、また伝え聞いた律法の書をおとして、主の御言葉を聞いていました。そこにはダビデの子としてメシア（救い主・キリスト）が与えられること、メシアにより救いが完成することが示されていました。そして彼らは、イエスがメシアであることを、洗礼者ヨハネにより、またイエス御自身の奇跡と御言葉の権威により知ることができました。御言葉が示され、救いの道を歩むことができる者が、御言葉に聞き従わないで行う罪は、知らずに行う罪よりも、遙かに大きい

「キリストの十字架」

ヨハネによる福音書一九章一四〜二三節

二〇一二年四月一日

I あなたにとって王は誰か？

復活の主イエスは、ペトロに相對し「あなたの罪を赦した。そしてわたしはあなたを救う」と宣言してくださいました。キリストはあなたにとってどのような存在であるのか？あなたは誰の支配、誰の基準に従って生きていくのかを、今日の御言葉は問いかけます。

ピラトは、主イエスを十字架に架ける時、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」という罪状を十字架に掲げました。彼がイエスを十字架に架けることを決めたのは、ユダヤ人の暴動を恐れてであり、それは自らの総督としての身分を守りたかつたからです。つまり、彼はイエスを尊敬していたかもしれないませんが、信じるまでには至らず、自らはローマ皇帝の僕であることを辞めようとはしませんでした。

一方、ユダヤ人たちは「殺せ。殺せ。十字架につける」と叫び続け、祭司長たちは「わたしたちには、皇帝（カイザル）の他に王はありません」と発します。ユダヤ人たちは、主に従うよりも、王に従うことを選びました。彼らが皇帝を選んだのは、あくまでもイエスを十字架に架けたかつたからですが、皇帝の価値基準に従って生きることを選んだのは、ピラトと同じです。

日本においても、過去に神社参拝が強制され、教会の礼拝において天皇を賛美するための宮城遙拝が求められました。日本の多くの教会は、「神社は宗教に非ず」との御上からの通達に従い、それに屈しました。「形だけで、心はちゃんと神を信じている」との方便を使ったのです。しかし形において従うことは、結果として、そこにある生き方の秩序に

従って生きていくことを示します。キリスト者は、何を信じているのか、何を絶対的な基準として生きていくのが、問われています。

天皇にまつわる様々な習慣が、私たちの生活に組み込まれ、知らず知らずの内に、キリストに従った生活から離れ、天皇に従った生活となっていくことに私たちは気がつかないかもしれません。日の丸・君が代、年号「平成」を用いること、「祝日」を用いること（天皇の祝祭であり、キリストの祝祭は降誕節・復活節・聖霊降臨節に限られている）、日曜出勤……。私たちは、それらすべてに問題意識を持ち、そこに潜む過ちに気がつき、信仰の戦いをしなければなりません。完全にそれらを排除することができないにしても、そこに問題があり、主の御前に自らの信仰の弱さを顧みることがしなければなりません。こうしたことに対する問題意識を持たずに信仰生活を送ることは、主が語られる基準である御言葉・律法に対しても、聞き従う意識が希薄となり、知らず知らずの内に、自己中心的な思いになり、主の御前に罪を犯す結果をもたらすことを知らなければなりません。主イエスは、山上の説教の中で語っておられます。「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」（マタイ六章二四節）。

II 生け贄として献げられるキリスト

私たちは、十字架に架けられるイエス・キリストこそが真の救い主であると告白します。十字架のキリストから目を離してはなりません。キリストは、私たちの罪の償い・生け贄として献げられました。現在の日本では、お祓い・厄除けといった儀式は行われますが、人や動物が生け贄として献げられることはなくなっています。

しかし、主イエス・キリストが十字架に架かれたのは、他宗教が行うお祓い・厄除けとは異なります。キリストの十字架は、私たちが災難に遭うことを予防するためではなく、私たち自身の罪の刑罰そのものです。つまり、主の御前にあって、私たちは自らの罪を確認し、悔い改めなければなりません（参照・ウエストミンスター信仰告白第一六章六節・

律法の第二用法)。

私たちは、キリストの十字架による生け贄によって罪の贖いが成し遂げられたため、もう動物による生け贄は必要ありません。しかし旧約の時代は異なります。メシアの約束は与えられていましたが、そのことが直接どのような形で行われるかが示されていませんでした。そのため繰り返して動物を生け贄として献げることにより、罪の贖いと神の救いを確認しました。そのため、旧約聖書では、焼き尽くす献げ物(全焼の生け贄)、穀物の献げ物、和解の献げ物、贖罪の献げ物が、詳細に規定されます(レビ記)。旧約の民は、動物の血を見、生け贄に献げられた物を食することに、命を司る神を覚え、罪の赦しと和解、救いを確認し続けたのです。そしてやがて来られるメシアによって、完全な罪の贖いが成し遂げられることを信じていました。

私たちの救い主イエス・キリストは、ユダヤ人の手によって有罪と宣告され、自ら十字架を背負い、ゴルゴタの丘へと登って行かれます。他の共観福音書では、キレネ人シモンが途中で代わって十字架を背負ったことを書き記しますが(ルカ二二章二六節)、ヨハネはそのことを記しません。つまり、主イエスが自ら生け贄となるために十字架を背負われたことが大切であるとヨハネは語ります。

アブラハムは、主からサラから生まれる子どもこそが跡継ぎであることが約束され(創世一五章、一八章)、そして百歳にしてイサクが誕生しました。しかし主は「その愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに上り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい」(創世記二二章二節)との命じられました。アブラハムは主を信じて、イサクを伴い、主が示される山に登っていきましました。このイサクの行為は、まさにキリストの十字架によって行われました(参照・ヘブライ一章一七〜一九節)。アブラハムは、信仰によって、義と認められました。キリストの御業により、私たちも信仰によって義と認められ、救いの中に入れられています。そのためにキリストが、私たちの救いのために、十字架に生け贄として献げられました。だからこそ私たちは、

今、生け贄を献げることにはしません。しかし、キリストの十字架、つまり手と足に打たれた釘、そこから流れ落ちる血、生臭さ、キリストのうめきを、私たちは御言葉によって確認し、キリストの十字架から目をそらしてはなりません。「ユダヤ人の王であるナザレのイエス」は、信仰により霊的なイスマエルとされた私たちの王です。世にある人々、日本における天皇の基準に生きるのではなく、主なる神の基準・御言葉に聞き従うことが、私たちに求められています。

## 「実現する聖書の言葉」

ヨハネによる福音書一九章二三〜二四節

二〇一二年四月二二日

### I 小さな出来事が書き留められた理由

主イエスは、十字架に架けられ、苦しまれていました。しかし、聖書は主イエスから目を離し、周辺のことを記します。ローマ兵によって、主イエスの着ていた服が分けられました。聖書の中では、非常に小さな記事です。しかし、ヨハネによる福音書は書き記します。ヨハネは、他の共観福音書が書き記さなかったことを中心に記してきました。しかし、この小さな記事は、共観福音書でも記されており、ヨハネも改めて記します。この小さな出来事は、聖書を知るためには大切なことが記されているからです。

この小さな出来事は、ローマ兵にとっては何気ない行為でした。犯罪人の衣服を分け合うことは、彼らにとっては戦利品を手にするごととして、普通の出来事でした。しかしこの小さな出来事は、旧約聖書においても語られていた出来事であり、それが成就したとヨハネは語ります。それが詩編二二章一九節に記されています。詩編二二編では、詩編の作者の苦難と叫び、それを超えた信仰による希望が歌われています。詩編の作者は、最初からメシアの受難の予告の歌として歌ったものではなかったでしょう。しかし主は、この詩

編をとおして、キリストの十字架の受難において成就したことを確認します。聖書では、これだけ小さな出来事までもが預言され、成就します。そうであれば、主の偉いなるご計画、つまり神の民を救うご計画はなおさらのこと、確実に成し遂げられるのであり、この偉いなる御業を私たちは読み取り、信じるのが求められています。

## II 預言が成し遂げられる神の御言葉

だからこそ私たちは、主によって示された預言が、成し遂げられていくことを、聖書全体の御言葉を骨折って読み続けることが求められています。その事実を知らないからこそ、信じるのができません。とにかく、私たちは旧約・新約の聖書を読まなければなりません。主なる神は、主の御前に罪を犯した人間に対して、一方的な救いを提示してくださいませ。原福音（創世記三章一五節）、ノアの祝福（同九章）、アブラハムの選び（同一二章）、出エジプト、そしてメシア預言がなされ、それが主イエス・キリストによって成就していきます。また主はイスラエルに繰り返し罪を悔い改めるように迫り、主の道を歩む民には祝福をお与えくださいますが、罪から離れない民には裁きを行われました。出エジプトにおける荒れ野の四〇年、南北イスラエルの分裂、北イスラエル王国の滅亡、南ユダ王国のバビロン捕囚……。

キリスト教は言葉の宗教です。イスラエルの民のように、主の約束に盲目になつてはなりません。主がお語りになつた預言は確実に成し遂げられ、約束は成就します。このことを私たちは御言葉である聖書、特に旧約聖書を読み、理解しなければ、本当の救いの確信、預言、救いが成し遂げられることの確信を持つことはできません。

ヨハネによる福音書がこの小さな出来事を記し、「聖書の言葉が実現するためであった」と付け加えたことは重要なことです。ヨハネは二八節、三六節でも繰り返します。「聖書の言葉が実現するためであった」という言葉は、聖書全体を理解するキーワードの一つです。だからこそ私たちの救いも確かに成し遂げられることを、私たちは確信して信じることができます。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われま

す」（使徒一六章三一節）との主の約束が語られています。日本語では「約束は破られるためにある」とも語られますが、主の約束は破られることがありません。救いの約束は「恵みの契約」です。契約は果たす義務が伴うのであり、主の約束は、破棄されることはありません。

現在、情報化社会になり、インターネットやスマートフォンを通じて、情報があふれています。私たちは何が正しい情報か選び出す必要があります。そこに知恵が求められます。しかし聖書に記された言葉は、神の御言葉であり、ロゴスそのものです。だからこそ、私たちは、情報過多な時代にあつて、真実を見失うことがあるうとも、主の御言葉である聖書の言葉は、揺るぎない神の御言葉として信じ、御言葉によって指し示されている主イエス・キリストの十字架の御業を救いの御業と信じるのが求められています。

そして、私たちの救いの希望は、神の国の完成にあります。昨日、井上二郎牧師の奥様の葬儀が行われました。井上牧師は、死を前にした夫人に、死の恐怖以上に、これからもたらされる神の国の祝福を語り伝えたことが紹介されました。私たちには、神の国における永遠の生命の祝福が約束されています（黙示録二一章三〜四節、六〜七節）。

「イエスと共にいる」

ヨハネによる福音書一九章二五〜二七節

二〇一二年五月六日

## 序

神を信じるとは、常に、インマヌエル「神我と共にあり」、コラムデオ「神の御前に生きること」です。だからこそ「有神論的人生観世界観に生きる」（創立宣言）のである。あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をやるにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」（一コリント一〇章三一節）と語られます。しかし、神と共にある、神

の御前に生きるとは、どういふことなのでしょう。

### I 信仰を保ち続ける姉妹たち

十字架に架けられている主イエスの前に四人の婦人たちが立っていました。①イエスの母マリア・彼女は聖母ではなく、一人の姉妹です（参照・二章四節、マタイ一・二章四八・五〇節）。②母の姉妹、③クロパの妻マリア、④マグダラのマリア。「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア」（ルカ八章二節）彼女たちは、捕らえられることを恐れず、主イエスの御前に立ち続けました。

ヨハネによる福音書は、滅び行く兵士たちのことを記し、一方で主イエスの御前に立ち続ける婦人たちについて語ります。彼女たちは、常に救い主イエス・キリストを意識し続け、主の御前に立ち続けました。私たちは、どれだけ主イエス・キリストを意識しながら、一週間の歩みを歩んでいるでしょうか？ もしそれが「日曜日だけ」、一週間の内六日間はどっぷりと世に染まっている歩みを行っているのであれば、その間は兵士たちと変わらなくなり、日々の生活・働き・学び・楽しんでいる間であっても、救い主を覚えつつ、救いに感謝しつつ、生活することが求められています。常に救い主を覚え、主イエスの御前に立ち続け信仰を貫くことが求められています。主イエスにこそ救いがあり、罪の赦しと永遠の生命の約束があることがはつきりと示されています。主イエス・キリストの十字架の御業は、私たちが永遠の死から救い出し、罪の刑罰から救い出し、天国における永遠の生命の喜びに満たしてください。だからこそ私たちは、今、主の御前に立って、私たちが常に主の御前に立ち続け、主を証ししつつ、主の求められる歩みを行うことができますように、主の御言葉に聞きつつ、祈り、願い続けます。

### II 主イエスの牧会

この時、主イエスはどのような思いをもっておられたのでしょうか。①滅び行く人たちに對して語られています。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ二三章三四節）。主イエスは、誰一人として、滅びの道を歩むことを

望んでおられず、最後まで、悔い改め、信じることを求めておられます。

②また主イエスと共に十字架に架けられつつ、自らの罪を悔い改め、主イエスを救い主として告白した四人に對しては、「はつきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」（ルカ二三章四三節）とお語りくださいました。神を信じ、救いの道を歩むとは、過去のことを問われることはありません。罪を犯したこと、主を信じていなかったことに對して、自らの罪を受け入れ、罪の悔い改めをし、その上で主イエス・キリストによる救いを受け入れ、信仰告白をすることを求めておられます。そして、信仰の道を歩む者に對して、主は救いの道を、お示しくださいます。

③主イエスはキリスト者に求められることをヨハネによる福音書で語られます。主イエスの母に對する愛が示されます（第五戒、参照・一テモテ五章一・三節）。主イエスは、御自身の十字架により罪赦され、神の民として生きようとする者たちに對して、「苦しいけれどもがんばって生きよ！」とエールを送られるではありません。神の民キリスト者であっても、地上の生涯の中にあつて、自分の力で生きることなどできません。信仰を貫くことなどできません。現代のように保険も年金もない時代にあつて、やもめの老婦人が一人で暮らしていくことなど困難なことでした。これからマリアの生活を、愛弟子であるヨハネに委ねることにより、マリアがこの世においても、希望をもって生きることができるよう、主イエスはお語りくださいました。それと同時に、愛する弟子であるヨハネに對して、主にある兄弟姉妹として生きる時に、遜り、仕えることによる、主の喜びがあることを示されます。

### III 神の民として生きる

私たちは、この後、聖餐の礼典に与ります。聖餐に与ることは、聖餐に与る私たちがキリストの十字架により罪が赦され、神の民とされていることを確認することであり、まさにキリストとの交わりに生き、聖徒の交わりに生きることです。

そして私たちが、キリスト者として主の救いの道を歩むことは、神を礼拝している時も、

日々の生活の場にあつても、常に神の恵みの下、神との霊的な豊かな交わりがあり、神を証しする者とされています。ユダヤ人たちや兵士たちのように神なき日常となつてはなりません。

そしてキリスト者は、常に神と共にあることを覚える時、キリスト者相互の交わりに生きる事が許されています。それは、苦しむ者・助けを必要とする者に対して助け合うことを通して、神による救いの喜びを分かち合うことができるからであり、ここに執事的な奉仕、ディアコニアがあります。

## 「成し遂げられた十字架」

ヨハネによる福音書一九章二八〜三〇節

二〇一二年五月一三日

### I 意思された主イエスの死

主イエス・キリストは、十字架に架けられ、死を遂げられます。多くの人たちは、主イエスは殺されたと思つています。主イエスが十字架上で息を引き取られたということでは、ユダヤ人たちによつて十字架に架けられ殺されたことは、間違つてはいないでしょう。しかし主イエスの死は、主御自身の意思の表れでした。十字架刑は、通常は二日〜三日の間、苦しみながら、死を遂げていくとされています。主イエスと共に十字架に架けられていた二人の囚人は、まだ生きていたため、足を折られ死を遂げました（三一〜三二節）。しかし主イエスは、そのことが行われる前に、息を引き取られました。つまり、神の御子である主イエス・キリストは、御自身の意思で、人としてお生まれなれました。それは父なる神の定められた時でした。そして肉の死を遂げられる時も、逮捕され成り行きで死を遂げるのではなく、その時を主御自身が定めておられました（ヨハネ一〇章一八節）。

### II 「渇く」…私たちの霊的状态

この時、主イエスは「渇く」と言われます。最後の晩餐を終えられ、ゲツセマネの園における祈り、逮捕、裁判とあり、十字架上で約六時間が過ぎていました。肉体的な苦しみ、渇きがあるのはもちろんのことでしょう。しかし、主イエスは、この十字架において、肉体の苦しみ・痛みに関して一言も言葉を発せられません。

ヨハネによる福音書は四章で、サマリヤの女の話を記します。この時、主イエスは、「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（四章一三〜一四節）とお語りになりました。地上における渇きは肉の死を語っており、キリスト・イエスに霊的につながることで与えられる永遠の命が示されています。また、山上の説教においては、「義に飢え渇く人々は、幸いである、その人たちは満たされる」（マタイ五章六節）と語ります。ここでの飢え渇きは、自分たちが持ち合わせていない義、つまり神の完全な義、行い・言葉・心における完全な義しさを追い求めることです。

私たち人間は、この地上においては、飢え渇いており、死を避けて通ることができません。そしてマタイ福音書が語るこの飢え渇きは、私たちが義を持ち合わせていない、つまり主の御前に罪が明らかにされるからです。だからこそ、義に飢え渇く、つまり自らを罪人として認め、悔い改め、神の義による救い、キリストの贖いを追い求めなければ、救いがないことを受け入れなければなりません。主イエス・キリストの十字架の姿、飢え渇きこそが、本来私たちが持つていた義に対する飢え渇きです。キリストは私たちに代わつて、義の飢え渇きを担ってくださいました。だからこそ、主イエス・キリストを救い主として信じる私たちは、今、もう飢え渇くことがありません。罪の赦しと永遠の生命に生きる希望に満たされているからです（参照：黙示録二一章六節、二二章一七節）。

### III 「成し遂げられた」御業、いまだ継続している御業

さて、主イエスは地上ですべての働きを終え、「成し遂げられた」と言葉を発せられ、息を引き取られます。何が成し遂げられたのか？ 一つは私たちの罪の贖いとして、生け



贄として十字架に架かられ、死を遂げられることです（消極的な服従）。

御子としての主イエス・キリストが御父から託されたもう一つの御業（積極的な服従）は、律法にひれ伏し、地上において律法をまっとうされたことです。人に罪が入ってきたのは最初の人が罪を犯したからであり、それ以来のすべての民は罪を繰り返します。そのため、キリストの十字架の御業において罪が贖われたとしても、主が最初の人に対して約束された命の契約をまっとうしたことにほなりません。キリストが人として、律法に仕えられ、まっとうされることも大切な働きでした。

この二つの御業は私たちを救うために、御子が人となれることによって成し遂げられました。しかしキリストの御業は死において終わりではありません。神として、主の第二位格としてのお働きは継続されます。死から三日目の朝に復活を遂げられ、そして天に昇られました。そして今も天において主の御業は継続されています。私たちに御言葉の聖書をお与えくださいました。また私たちが救われるために、執り成し続けてくださっています。

私たちの渇き、つまり罪の刑罰は、すでにキリストの十字架において取り除けられています。だからこそ私たちには永遠に尽きることのない命の水が与えられています。世にある尽きるものではなく、キリストにある渇くことのない永遠の命を求め続けていこう。

## 「十字架の真実の証言」

ヨハネによる福音書一九章三一〜三七節

二〇一二年五月二〇日

### 序

人間の記憶は、完全なものではありません。一つの出来事、事故、あるいは災害が起こった時には、鮮明に記憶し、その事実をいつまでも覚えておかなければならないと思っ

いたとしても、次第に記憶は薄れます。ましてや世代が下ると忘れ去られていきます。

### I 真実を証言し、語り伝えよ！

事実を伝えていくためには、記録に残すこと、そして伝えていくことが求められます。現代は情報化社会となり情報が溢れています。そのため記録すら埋もれてしまい、大切な記録は、語り伝えていくことがより重要となっています。聖書は、主イエス・キリストが、十字架の上で死を遂げられたこと、そして三日目の朝に復活を遂げられたことを、事実として書き留めます（エマオの途上（ルカ二四章）、パウロの証言（Iコリント一五章三〜六節）等）。そして「それを目撃した者が証ししており、その証しは真実である。その者は、あなたがたにも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている」（一九章三五節）と書き加えます。

十字架と復活は奇跡であり、事実であったとしても、ちゃんと語り継がなければ、人はその事実を信じることはできず、否定します。だからこそ出エジプトにあっても、主はその事実と主の律法を子どもたちに語り継ぐようにくどいくらいに語ります（申命記六章四〜九節）。それでもイスラエルは主の御力・神の愛を忘れ、神から離れ、偶像崇拜を行い、軍事力に頼ろうとします。その結果、イスラエルは分裂し、さらに滅ぼされて捕囚の民となります。

だからこそ、私たちは聖書に記された事実を私たち自身が確認して、真実として受け取り、さらに、一人ひとりが子どもたちに、そして人々に語り継いでいくことが求められています。他人まかせ、牧師まかせではなく、一人ひとりが御言葉から主の偉大な御業を確認し、畏れ、ひれ伏し、感謝と喜びをもって、聞き従わなければなりません。

### II 伝えなければならぬ真実

では、私たちが語り継ぐべき事実とは何でしょうか？ 繰り返して語られるキリストの十字架と復活の事実です。それにもう一つ。兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した時に、血と水が流れ出たことです（三四節）。このことが医学的に検証できるか否かは問題

ではありません。その事実が語るしるしを確認することが大切です。

「血」と「水」は何を何を語ろうとしているのでしょうか。私たちは、十字架の血が、私たちの罪の贖いのためであったことを知っています。旧約の時代は、主の御業がまだであったため、動物の生け贄を繰り返して行ってきました。そして新約の現代は、聖餐式により、このことを確認します。聖餐において配餐されるパンがキリストの体、ぶどう酒がキリストの血であることを霊的に表しています。そしてキリストの十字架こそが、私たちの救いであつたことを確認します。

一方「水」に関しては、先週も確認してきたとおりです。つまりキリストこそが、永遠の生きた水をお与えくださる方であり、キリストを信じ、キリストにつながるこそが、渴くことのない永遠の生命、神の御国に導かれます。

では、なぜここで血と水が、あえて二つあつたことを、聖書は真実なこととして書き残し、私たちは語り継いでいかなければならないのでしょうか。キリストの十字架においてもたらされた二つの恵みが密接に関連しているからです。それらを総合して私たちは受け入れなければなりません。つまりキリストの十字架の御業により、一方にあってはキリストが生け贄として献げられ血を流されることにより、私たちの罪の贖いが成し遂げられ、もう一方、このキリストにより、永遠の生命が与えられました。罪の赦しと永遠の生命、この二つのことが、キリストの御業によって私たちに与えられました。

このことをヨハネは手紙においても確認しています（Iヨハネ五章六〜九節）。ここでは、水と血、それを“霊”が証しすると語ります。つまりキリストの御業は三位一体論的（水・御父の救いの計画、血・御子の贖い、霊・御霊の働き）にとらえることが必要です。キリストの御業は、書き留められ、語り続けられています。しかし御霊の働きがなければ、人々はこの事実を知り、信じることはできません。私たち自身は、直接キリストの十字架と復活に立ち会うことはできません。しかし御言葉が証しされ、御霊が働く時、私たちはこの事実を知り、信じることができます。

## 「勇氣ある申し出」

ヨハネによる福音書一九章三八〜四二節

二〇一二年六月三日

### 序

日本では、キリスト者が人口の1%にも達していません。そのためキリスト者は日々の生活の中、様々なところで信仰が問われ、キリスト者であることを隠す人もいます。

#### I ヨセフに見る信仰

主イエスは十字架の上で息を引き取られ、遺体が十字架上に取り残されています。このままでは、犯罪者たちが葬られている墓に、主イエスも一緒に葬られることとなります。弟子たちは恐れを抱いて逃げ去り、女性たちも遠巻きに見ているだけです。

この時ヨセフという人物が、ピラトの下に行き、主イエスの遺体を取り下ろしたいと願います。ヨセフがどのような人物であつたのか、四福音書を読み比べるにより、明らかにあります（マタイ二七章五七節、マルコ一五章三四節、ルカ二三章五〇〜五一節、ヨハネ一九章三八節）。彼は身分の高い議員つまり最高法院の議員であり、ファリサイ人でした。そしてイエスを神として信じていながらも、誰にも隠していました。

ヨセフは、主イエスの裁判において、ユダヤ人たちと共に主イエスを有罪にすることに對して反対することに同意しないだけ、つまり黙ったままでいました。しかし主イエスは息を引き取り、もう言葉を発せられることも奇跡や癒やしを行われることがなくなつた今、ヨセフは主イエスへの信仰の表れとして、遺体を引き取ることが申し出ます。

彼が、自らの信仰を隠し続けてきたことは、褒められたことではありません。しかし彼は長い間、自らの信仰をどのように表そうとするのか、悩んできていました。自分たちの仲間であるユダヤ人たちは、主イエスを逮捕すること、殺すことに躍起になっていました。そうした中、彼は一人でそれに反対を表明することは、ユダヤ人であることを辞める決意、ファリサイ人を辞める決意が必要でした。仕事を投げ捨て、生活を捨て、そして社会から

出て行く覚悟がいらいます。今まで彼はそれができませんでした。特に彼は、金持ちでああり、新しい墓を持つほどだったからです。

しかしヨセフは隠れクリスチャンでは終わりませんでした。勇気を出して、主イエスを引き取る決意が与えられました。主イエスが罪人と共に葬られようとしている中、自分と与えられた使命が示されます。「自分は他の弟子たちのように、主イエスを信じてと表明し、主イエスに従うことができなかった」。彼は負い目がありました。しかし今、他の弟子たちが逃げて行き、主イエスの遺体を引き取ることをしない中、安息日まで三時間と迫っています。この時、彼は遺体を葬る決意が与えられました。彼にしかできないこと、クリスト者として、自分に与えられた使命がここにあることを彼は知りました。

神は、クリスト者一人ひとりに賜物を与え、異なった働きを求めておられます。ローマ一二章では、一つの体が多くの部分から成り立っていると語り、クリスト者が異なった賜物、働きがあることを語ります。そして彼は、もう皆に信仰を表明し、クリスト者としての歩みを初めて行くことを決意します。ここに集う一人一人ひとりもまた、主によって神の民として、すでに召されています。しかし一人ひとりが主によって召しを受け、与えられている賜物を用いて、主に仕え、主を礼拝し、信仰生活を送る者とされています。

## II ニコデモ

さて、今日の御言葉には、もう一人、この時に自らの信仰を人々の前で明らかにした人物がいました。ニコデモです。ヨセフは信仰を明らかにしピラトの前に申し出る勇氣ある行動を起こしたことに對して、ニコデモはヨセフにつられるように、ようやく信仰を人々に明らかにして、主イエスを葬るためのものを準備します。

ニコデモも、ヨセフ同様に隠れクリスチャンでした。三章で彼について記されています（三九節）。彼はフアリサイ派に属する議員であり、人々に信仰を隠すために、夜に主イエスの所に行き質問していました。彼はまさに主イエスが救い主であることを信じていましたが、それを人前で表明することができませんでした。

そしてこの三章における主イエスとのやりとりにおいて、ニコデモは主イエスから次のように語られていました。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。はっきり言うておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう」（三章一〇〜一二節）。ニコデモは主イエスからユダヤ人の代表のごとくに、「あなたは主を信じることができないのだ」と宣言されていました。

そのニコデモが、死を遂げられた主イエスを丁寧に葬るために、進み出ます。没薬と沈香のまぜた物を一〇〇リトラばかり持つてきたと記されています。一〇〇リトラは、約三二kg程です。ヨセフがピラトの所に行き、主イエスの遺体を引き取りたいとの申し出を行っている最中、主イエスを葬るために、ニコデモは自分の家に帰り、これらのものを持つてきました。

ヨセフが信仰を表し、墓を提供できたように、ニコデモは主イエスを丁寧に葬るための一式の道具がすぐに用いることができる状態で持つていました。主なる神は、ヨセフにしろ、ニコデモにしろ、この時に信仰を告白し、行動することができるよう準備してくださっていました。

まさに、ニコデモにとっては、自分でも予想もしていなかった信仰の表明だったのでないでしょうか。しかしこの時に、主は聖霊をおしてニコデモに働きかけ、そして主を信じる主の民として生きるように押し出してくださいました。

## III それぞれの信仰の歩み

主イエスが葬られる時、電光石火のごとくに、ヨセフとニコデモが登場します。ここから私たちが考えなければならぬことは、主は一人ひとりの信仰者をお覚えくださり、その働きを準備してくださっています。長い間、人々の前で信仰を告白し、クリスト者として生活を送ることができなかった人がいたとしても、主が神の子として御計画に入れてく

ださっていけば、時が与えられ、信仰者としての歩みを始めます。  
私たちは、今から聖餐式に与ります。聖餐に与ることにより、私たちは、神によって召されたキリスト者であることを確認します。ペトロでもヨハネでもなく、ここに出てくるヨセフでもニコデモでもなく、今、主の御前に集められているあなたを救うために、主イエスは十字架で死を遂げてくださいました。主による救いを覚えつつ、キリスト者として歩み続けていきましょう。

## 「イエスの復活を信じる」

ヨハネによる福音書二〇章一〜一〇節

二〇一二年七月一日

### 序

キリスト教は、神の御子イエス・キリストが十字架の死から三日目の朝に復活を遂げられたことを信じるところに、信仰の確信があります。

### I マグダラのマリアの信仰

パウロも語ります。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われま

す」(使徒一六章三一節)。これは行い・善行による救いの獲得、私たちの功績ではなく、主がお与えくださった救いの恵みを受け取り、信じることによって救われることを語っています。この時、どのように信じているのか、そして信じてどのように生きるのかが問われます。

さて、主イエスが逮捕され、裁判にかけられ、十字架に架けられる中、最後まで主イエスに従い続けたのが婦人たちです(一九章二五節)。主イエスが死に、墓に葬られた後、安息日が明けた朝に婦人たちは、再び、主イエスの墓に向かいます。ヨハネによる福音書は「マグダラのマリア」の名のみを記しますが、あえて他の婦人たちの名を記さなかった

と言っているでしょう。ヨハネは婦人たちを代表させて彼女の名を記します。

彼女は以前七つの悪霊が取り憑かれており(ルカ八章二節)、廃人の如く、罪人の頭として生きていました。しかし主イエスは彼女と出会い、彼女からすべての悪霊を追い出されます。彼女は主イエスを救い主として信じ、弟子たちと一緒に行動をしていました。彼女は主イエスの神としての御力を知り、信じ、そしてすべてを献げて主イエスに従っていました。

この彼女が、空の墓を見つけます。とりあえず弟子たちに伝えませんが、放心状態であったでしょう(一一節)。彼女は復活の主イエスに出会う信仰はまだ生じていません。

### II ヨハネの信仰

シモン・ペトロと主イエスが愛しておられたヨハネは、急いで墓に走って行きます。そして二人は相次いで墓の中を覗きます。ヨハネは見て、信じたと聖書は記します(八節)。その第三者的に語りませんが、ヨハネによる福音書の著者であるヨハネです。しかし彼はまだ復活の主イエスと出会っていませんでした(九節)。ここで彼は何を信じたのでしょうか？ ユダヤ人は、キリストと呼ばれるメシアが現れることを信じていました(ヨハネ四章二五節)。また、終わりの日に復活することを信じていました(ヨハネ一章二四節、ラザロの復活に対して)。しかしそれらは一般的なことであり、抽象的です。ヨハネがここで「信じた」と語るのは、こうした意味での信仰告白であり、漠然としていました。信仰は漠然であってはなりません。現実性、真実性が求められます。盲目的であってはなりません。

ですから、ここで「見て、信じた」と語るのは、本当の意味での信仰告白ではなく、むしろ不信仰の表れです。

### III 信仰を告白するとは…

では、私たちは、主イエス・キリストをどのように信じるかが求められるのでしょうか？ マグダラのマリアは、信じることができず、泣き戸惑っていました。しかしヨハネ

は「信じ」ました。ヨハネや他の弟子たちは、主イエスと共に行動し、主イエスが奇跡を行われるのを見て、知っていました。しかし弟子たちは、主イエスが行われる癒やしや奇跡を、テレビを見るように眺めていただけで、現実味がありませんでした。

一方マグダラのマリアは、主イエスと出会うことにより、悪霊を追い出して頂いた経験を持つ者として、イエスが救い主としてのリアリティを持って信仰生活を送ってきていました。その表れが、主イエスが逮捕されようが、十字架に架けられようが、主イエスに従い、近くに寄り添い続けた行動に表れています。だからこそ、彼女の主イエスに対する思い、主イエスに対する告白の一言には重みがあります。主イエスにある神の御力の表れである奇跡や復活のイエスに出会うことは、驚きであり、恐怖、畏れが伴います。マグダラのマリアはそれを知っていたからこそ、この場面では、信じることができませんでした。しかし復活の主イエスと出会った時、「ラボニ、先生」（二〇章一六節）と語り、信じました。

私たちに求められている信仰は、まさに復活のイエスと出会い驚くこと、復活のイエスをリアリティ、現実味を持って信じることです。知的に、言葉尻で捕らえてはなりません。しかし私たちは、直接復活のイエスと出会うことはできないわけであり、見ないで信じる幸いに与らなければなりません。だからこそ私たちは、御言葉により、聖霊の働きにより、復活の主イエスと出会うことを求めなければなりません。そうすることによって、この衝撃に立ち会うことができます。

私たちは、この後、聖餐式に与ります。十字架のイエスを覚えながら、十字架の苦しみ、恐怖を覚えつつ、主イエスが私の身代わり十字架に架かって、死を遂げてくださったこと、そして復活してくださったことを、心から感謝して頂きたいと思えます。

「神を信じる」信仰の告白が、言葉のみ、思弁的になることなく、信仰のリアリティを持った時、私たちは、神の御言葉に聞き続ける者とされます。救いの喜びに満たされます。そして、主の恵み、主の律法に仕えることができます（参照・ローマー二章一〜二節）。

## 「復活の主イエスと出会う」

ヨハネによる福音書二〇章一一〜一八節

二〇一二年七月八日

### I 弟子たちとマグダラのマリア

キリストは、十字架の上で死を遂げられ、三日目の朝に死に打ち勝ち復活されました。そして遺体が葬られた墓は、空になっていました。そのため安息日が明けた朝に墓に来たマグダラのマリアもペトロも主イエスの愛する弟子であるヨハネも、復活の主イエスと出会うことはできませんでした。墓の中に残されていたのは、遺体である主イエスを包んでいた覆いや亜麻布だけでした。主イエスが十字架に架けられる前に語られていた、十字架の死と復活の予告に耳を傾け、信じていれば、弟子たちもここで復活について頭がよぎったはずですが、だれもその事実を知ることができません。

ペトロとヨハネは、墓が空であることを確認すると、家に帰って行きます。この時彼らは、マリアが語ったこと、つまり墓が空である事実が分かれば良かったのです。弟子たちは、主イエスの遺体はどこに行ったかよりも、主イエスが逮捕され、死を遂げられたことにより、自分たちにも同様の危害が加わることを恐ろしかったのです。

しかしマリアは墓の外で立って泣いていました。放心状態です。マリアにとってユダヤ人がどうこうは関係がありません。自分に取り憑いていた七つの悪霊を追い出し、自分の人生に救いの喜び、生きる希望をお与えくださったイエス・キリストがどうなったのか、なぜ遺体がなくなったのか、確認しなければ納得ができません。

### II 天使との出会い

マリアは恐る恐る墓の中をのぞき込みます。この時、彼女は二人の天使に出会います。旧約聖書では天使や主の使いが度々登場しますが、新約の時代に、天使が出てくるのは、希です。主イエスが誕生する時、マリアに受胎告知がなされたことは有名ですが、ヨセフに対しては天使をおして様々な告知がなされていきました。また洗礼者ヨハネの母エリ

ザベトや父ザカリアに働きかけたのも、天使です。新約聖書において、天使は重要な場面で登場します。最初に墓に入ったペトロとヨハネは天使の存在に気がつきません。天使は霊的な存在であり、それとと思う人の所にしか表れません。

しかしヨハネは、天使に対してマリヤが素っ気ない対応をしたことを記します。しかし、復活の主イエスがマリヤと出会い、「ラボニ」と答えた時、天使たちはそのことの証言者として重要な位置づけが与えられています。だから天使は二人でした。

### III 復活のイエスとの出会い

マリヤは、復活の主イエスと出会うことも態度は同じでした。三日前まで一緒にいた人が声をかけてくださったのに、イエスだとは気付きませんでした。これは不思議なことです（ルカ福音書二四章一三〜三五節に記されているエマオの途上の場面においても同様です）。

十字架以前の主イエスと復活された主イエスは、別人の体となったのでしょうか？ いままで一緒にいて寝起きを共にしていた者が、姿を見て、声を聞いても分かりませんでした。しかし主イエスは、御自身の復活を疑ったトマスに対しては、十字架の傷を示されませんでした。ですからまったく別人に変化したものではありません。これは聖書の奥義であり、私たちにとっては不思議な出来事ですが、興味ながらに踏み込み詮索すべきではありません。しかし、エマオの途上の二人の弟子たちは主イエスが食事の祈りを行った瞬間に、そしてマグダラのマリヤは主イエスが「マリヤ」と呼びかけてくださった瞬間に、このお方が復活の主イエスであることを気付きます。これは人間的な特徴によって理解できたものではありません。ここに主の御働き、聖霊の御業が、弟子たち、マグダラのマリヤに対して働いた瞬間です。復活の主イエスに出会うことにより、主によって、救いの中に入れられ、神の民とされた瞬間に、聖霊が働きかけ、主なる神による救い、主イエス・キリストの十字架の贖いを受け入れ、信じる者へと変えてくださいます。私たちは、直接、目と目を合わせて復活の主イエスと出会うことはできません。しかし

主は今、御言葉を通じて私たちに語りかけてくださり、聖霊の働きが私たちに与えられています。そして復活のイエスと出会うことにより、私たちは十字架の上の主イエスを見上げる事ができます。そして死から復活をしてくださった主イエスが私たちと共にいてくださいます。私たちも、復活の主イエスと出会い、主を救い主として信じる時、救いの希望に入れられます。人生は、孤独、艱難、災害、迫害……さまざまです。しかしキリストが私たち自身が背負う十字架を担ってくださいました。重荷は軽くされています。乗り越えることができます。そして救いの希望に生きることができます。

### 「真ん中に立つ主イエス」

ヨハネによる福音書二〇章一九〜二三節

二〇一二年七月一五日

#### I 主イエスと出会う

弟子たちは、ペトロとヨハネの報告を受け、またマグダラのマリヤから「わたしは主を見ました」との証言を受けました。しかしここには喜びはなく、ユダヤ人たちに對する恐れがあるだけでした。事実を聞いただけでは、信じることはできませんでした。弟子たちは、主イエスが十字架に架けられる前に、様々な福音を聞いてきました。知的理解は深まっていたはずですが、しかし、五〇〇〇〇〇人養いの奇跡を見、病人の癒やしに立ち会い、ラザロの復活に立ち会っても、主イエスの復活と結びつくことはありませんでした。

このことは今説教を聞いている私たちにも当てはまることです。説教を聞いて、理解したとしても、聖霊が宿っていないならば、信仰を持つことはできません。私たちは自分の都合の良いように説教を聞いていてはダメです。石の心に鎧を着飾って説教を聞いていても、信仰に結びつくことはありません。

#### II 平安 神と共にある

しかし主イエスは、鍵をかけ閉じこもっていた弟子たちの前に現れ、「あなたがたに平和があるように」と語られます。これは「平安・安かれ」と訳すべき言葉です。私たちが「平和」と語れば、戦争のない、また放射能に汚染されることのない、毎日が安定した喜びに満ちた平穏な生活を思い浮かべるかと思えます。しかし、ここで主イエスが語られた「平安」は、そうではありません。信じるが故に信仰の戦いが強いられます（参照・パウロⅡコリント一章二三〜二八節）。韓国の殉教者、朱基徹（チュキチュル）牧師や孫良源（ソンヤンウォン）牧師のことも心にとめておくことができます。彼らは殉教しました。しかし地上での生涯は不幸であり不遇であったのでしょうか？ 決してそうではありません。苦しみ、迫害されました。しかしキリストが共におられ、主の平安が与えられていました。

今の時代にも信仰の戦いを強いられている人たちがいます。日曜出勤が求められる人々、日の丸・君が代を強制させられている方々。体と霊、魂が引き裂かれるような信仰の戦いを行っておられます。しかし彼らにこそ、主の平安があります。

主がお語りくださる「平安」とは、その場限りの慰めではありません。「わたしはいつまでもあなたがたと共にいる。そしてあなたがたは、罪赦され、神の民として永遠の生命が与えられた、天国における祝福がある」と主イエスは宣言してくださっています。主イエスのこの約束は、地上での生涯を終えるまで、いや復活の体が与えられ、天国における永遠の生命が与えられるまで、継続する祝福です。だからこそ、信仰の戦いを行い続けることができます。別の視点から語れば、信仰の戦いを行わずして、主の平安は与えられません。

### Ⅲ 平安 世に遣わされて

そして、主イエスは再び弟子たちに語られます。「あなたがたに平和があるように」。主イエスは同じことを単に繰り返されたものではありません。初めはまさに、主イエスと弟子たちの関係、一人ひとりが、主イエスによる救いにつながり、信仰の恵みに入れられて

いることを確認したのです。

しかし二度目に主イエスが「あなたがたに平安があるように」と語られた時には、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」との言葉が続きます。つまり神による平安に生きるキリスト者、罪の赦しと永遠の生命の希望に生きるキリスト者は、個人的な信仰に留まることはありません。公同教会の広がり、宣教の広がりがあります。キリストの復活は、宣教とのつながりが不可避です。だからこそ、復活の主イエスは大宣教命令を語られます（マタイ二八章一八〜二〇節）。

ここには疑いはありません。日曜日だけキリスト者として教会に来ていれば良いと言った思いもありません。主はあなたのすべてに対して、あなたのすべての時間に対して、あなたのすべての人生に対して、主は「平安であるように」と宣言してくださっています。だからこそ私たちは、主の平安の内にこの世での歩みが続けていくことができます。この時、信仰の戦いも生じますが、それと同時に、どのような時にも、信仰を貫き、それが主を証しし、宣べ伝える者とされます。

### 「信じる人は救われる」

ヨハネによる福音書二〇章二四〜二九節

二〇一二年七月二二日

### 序

「信じる人は救われる」つまり信仰義認は、宗教改革の旗印の一つです。宗教改革者たちは、行いや免罪符によって救われるのではなく、聖書を解き明かし、聖書は信じることによって救われる（信仰義認）と語り、それと同時に、自分たちの言葉で聖書を翻訳し、聖書を読むことを求めました。

### I 不信仰者の代表としてのトマス

弟子たちは「わたしたちは主を見た」と告白したことに対して、トマスはその言葉を信じる事ができませんでした（二五節）。トマスの不信仰をおもしろおかしく読むのではなく、主はトマスを通して、私たちの信仰はどうかであるべきかを問いかけていることを忘れてはなりません。

またヨハネ二〇章では、マグダラのマリヤ、ペトロとヨハネを含む弟子たち、そしてトマスが取り上げられていることに着目しなければなりません。つまり、弟子たちはマグダラのマリヤが「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えたにも関わらず、弟子たちは、主イエスの復活を信じる事ができませんでした。そして家の戸に鍵をかけていました。つまり弟子たちも殻に閉じこもり心の扉をも閉じて、誰も入ってこないようにしていました。しかし、復活の主イエスは、鍵をかけてあった家の中に入ってきてくださったように、殻に閉じこもり、石の心、不信仰の固まりであった弟子たちの中に入ってきてくださり、心の扉を開けて、主を信じるものへと導いてくださいました。弟子たちに与えられた信仰とは、まさに主から一方的に与えられた恵みです。

## II 主の日の祝福

八日後、つまり次の週の初めの日にも弟子たちは同じように鍵をかけて家の中に閉じこもっていました。旧約の時代、安息日は第七日でした。安息日が明けた、週の初めの日に復活を遂げられ、その日の夕方、弟子たちの前に現れ、八日の後、再度現れになられました。だからこそウェストミンスター信仰告白では、主の日のことを「キリスト教安息日」（二一章七節）と語り、主の日を一日、安息日として覚え、公的・私的に神礼拝を守る日とすることを求めます。

主イエスの復活の日、トマスはどういう理由かは記されていませんが、その場所にいませんでした。そのためトマスは、一週間待たされ、次の主の日になって、復活の主イエスと出会い、平安が宣言され、主の祝福に満たされました。主の日に主を礼拝することにより、主と共にあり、罪の赦しと神の国における永遠の祝福に満たされます。つまり、主の

日に主を礼拝することは、主イエスの弟子たちに特別に与えられた恵みです。そして主イエスは、主の日の礼拝に招かれている私たちに今も「平安であるように」とお語りくださっています。

## III 信じる者は救われる

また主イエスはそのトマスに対して、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」とお語りくださいました。これは何も叱責ではなく、主はトマスの弱さ、罪を指摘されつつ、なおも、主は彼を捕らえ、平安をお与えくださっています。

現代でも「イエスが復活したことは信じられない」と語る人々は多いでしょう。石の心であり、自分の殻に閉じこもっているからです。しかし、復活の主イエスはまさにこういう人たちの心の中に入ってくださり、語り続けてくださいます。神が、私たちにいのちを与え、私たちを救い、私たちを永遠の生命である天国に導いてくださいます。

私たちに命を与え、私たちに平安をお与えくださる事ができる神であるならば、私たちの頭で考えられる範囲に留まるお方であるはずがありません。しかし、嵐がいきなり静まり、病人が癒やされ、死人が復活する力を持つているお方こそが、真の神、主なる神です。私たちは神を私たちの頭で一生懸命理解しようとしても、信じることはできません。私たちの知的努力においても達成できない信じるという行為を、救い主イエス・キリストが私たちのために死を遂げてくださったこと、死に打ち勝ってくださいましたこと、さらには主が御自身の聖霊の働きを通して、主が真の神であることをお示しくださることににより、石の魂を砕いてくださり、神の愛、キリストによる十字架によって救いが与えられていることを信じる事ができるように導いてくださいます。

だからこそトマスは、復活の主イエスと出会うことにより、「わたしの主、わたしの神よ」と告白することができたのです。主は、一方的にトマスの前に現れてくださり、平安をお与えくださいました。復活の主イエスと出会うことは、単に人間イエスが復活されたことに留りません。主イエス・キリストが復活されたことは、主イエス・キリストが、単



なる人ではなく、自然を超えた力を持つ真の神そのものであり、唯一の主であることを証ししています。そして、主イエス・キリストを信じる私たちもまた、主イエスのように復活の体が与えられ、永遠の生命の希望があることを示してください。だからこそ、主イエス・キリストこそが、主である、唯一の神であるとトマスは告白できたのであり、私たちも告白し、そして礼拝し続けます。

「イエスは神の子メシア」

ヨハネによる福音書二〇章三〇〜三一節

二〇一二年八月五日

序

宗教改革の伝統に生きるプロテスタント教会、そして私たち改革派教会において、聖書のみ、聖書全体という言葉がキーワードとして用いられてきました。

## I 聖書のみ、聖書全体

宗教改革当時のカトリック教会は聖書を用いることなく、教会にこそ権威があることを語り、伝承を重視し、人間の造りだしたことを教えていました。それに対して、宗教改革者たちは、「聖書」をとおして「信仰義認」を語り、聖書以外のものから語ることは、神の求めではなく、聖書から語られなければならず、「聖書のみ」であることを強調しました。現在でも、説教において聖書の言葉が解き明かされることなく、説教者の持論が語られることがあり、「聖書のみ」を忘れてはなりません。

また私たちが「聖書のみ」と語る時、私たちは、神の御言葉に徹底的に聞き従うことが求められています。この時大切なことは、私たちが主體的・能動的に「聖書から何を学ぶか」ではなく、「聖書は私たちに何を語るのか」と私たちは受動的に神の御言葉に聞き従うことが求められています。そうすることにおいて、私たちの日々の生活においても、主

の御言葉に聞き従う神中心の生活へと変えられていきます。

また「聖書のみ」は、聖書の一部、主イエス・キリストの十字架のみ、福音書のみ、新約聖書のみではなく、聖書全体です。つまり創世記から始まり、旧約の歴史、そしてメシアの約束、主イエス・キリストの誕生と生涯、十字架、そして使徒の歩み、黙示録という救済史の全体を通して、主は私たちに語りかけておられます。

## II 聖書には何が語られているか？

私たちは聖書に何が記されているか確認しなければなりません。つまり聖書とは、私たちが神を信じる信仰を得るために必要なことが記されているのであって、歴史書や科学の教科書ではありません。

また聖書を私たちの知的理解の範囲で受け入れ、それを超える奇跡・癒やしを作り話として否定しつつ読むことは、無意味です。私たちの知的範囲の中に神を閉じ込めてはなりません。主なる神は天地万物を創造し、自然の秩序を定めてくださったお方です。つまり、神は有限に存在するすべてのものをお造りになられた、空間的・時間的・変化において、無限・永遠・不変の存在であり、有限・時間的・変化し続ける存在である私たち人間の理解できる範囲で考えようとしても、聖書が語る神を受け入れることはできません（参照・ウエストミンスター小教理問四）。聖書を批判的に読み研究することは、聖書を神の御言葉と理解することなく、一文学書として取り扱っていることを意味します。しかしこのような読み方をして以上、「イエスは神の子メシアである」と信じる「ことはできません」。

しかし私たちは聖書を「神の御言葉」であると宣言します。つまり聖書は、私たちがイエスは神の子メシアであると信じるために記されている書物です（三一節）。聖書が人間が記した言葉であれば、そこに記されている神も人間が造りだしたものとなります。しかしかそうではないことを私たちは聖書の言葉から読み取らなければなりません。聖書をおして、神が私たちに訴えています。主イエス・キリストこそが、神の子メシアであり、イエス・キリストを信じることににおいて、私たちは救われ、永遠の生命が与えられます。私

私たちはこの真実を聖霊の働きにより受け入れることができます。

### III 聖書をどのように読まなければならないか

では、私たちは聖書をどのようにして、何を求めて読むのでしょうか。批判的に読むべきではありません。あるいは知恵・知識・教養を蓄えるために読むのも本来の読み方ではありません。また、つまり倫理・道徳教育の一環として聖書を読むのも相応しくありません。また生活一般に関する“How To”を学ぶための書物でもありません。

聖書を読む時、神が語りかけてくださいます。先入観を捨てなければなりません。神が聖書をおして何をお語りになるのか、神が私に何を命じにらなれているのかを、すべて受け入れる気持ち、つまり空っぽの器に主の御言葉が蓄えられ、その御言葉に聞き従って生きようとする気持ちが必要なりません。そして聖書全体を読み続けなければなりません。そうすることにおいて、主は、聖霊をおして御子イエス・キリストの十字架の贖いにより、あなたの罪が赦されたことを、あなたの魂に訴えかけ、それを受け入れ、信じる者へと変えてくださいます。主の御言葉に聞き、主の御言葉を信じ、主の御言葉に聞き従った歩みを行いましょ。

### 「イエスの言葉に従う」

ヨハネによる福音書二一章一〜一四節

二〇一二年九月二日

### 序

復活の主イエスと出会うことは救いそのものです。しかし復活の主イエスと出会うことと、復活の主イエスと共に歩み続けることとは異なります。二〇〇〇年前に行われた主イエスの復活を信じていれば良いものではありません。信仰は過去の出来事ではなく、今、私たち自身の問題です。私たちは、神の御前で、神と共に歩むことが求められています。

### I 主と共に歩む

復活の主イエスと出会った弟子たちは、ダイベリアス（ガリラヤ）湖畔において、漁に出ていました。ペトロたちが先頭に立ち、その日の食料となる魚を捕ろうとしていました。ガリラヤ湖は、彼らの地元であり、いつ・どこに網を下ろせば良いのか、十分把握していませんでした。しかしこの日に限っては、一匹も取れませんでした。私たちは、この現実をはつきりと知らなければなりません。つまり、彼らは復活の主イエスと出会い、復活の主イエスを信じました。しかし、ここに主イエスはおられません。弟子たちは自力で魚を取ろうとしました。つまり、復活のキリストを信じたとしても、自分の力に頼って何かを行おうとすれば失敗します。ここには信仰がないからです。

その後、彼らは復活の主イエスと出会います。そして主イエスの「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」との言葉を信じて行動した時、網がはじけんばかりの魚を獲ることができました。つまり信じることは、復活の主イエスを信じると共に、今も主イエスと共に歩むこと、主イエスにすべてを委ねること、主イエスの恵みに与ることが必要です。私たちも聖霊をおして、常に主イエスと共に歩むことができます。

主イエスはペトロたちを弟子とする時、「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」（ルカ五章一〇節）と語られました。つまり私たちの日々の生活において主イエスと共に歩むのですが、伝道においても同様です。つまり伝道を行う時も人間的な方法で行うのではなく、私たち自身が霊的に満たされ主イエスのお与えくださる御力をもって、主イエスに委ねて伝道することが求められます。人間的に何かを行えば失敗します。

### II 主の養い

次に、弟子たちは主イエスによって食料が与えられたことに着目します。私たちは、飢え渴きを覚えることがなく、現在は飽食の時代です。しかしここにある主の恵みを忘れてはなりません。主の祈りの第四祈願は「日用の糧を今日も与え給え」です。

弟子たちも、漁をすれば食事が食べられると疑いませんでした。しかし、主はこの時、

彼らの求めに答えてくださいませんでした。主の許しがなければ、食べたいと願っても、食べることができません。そして主の恵みに入れられた時、網が破れるほどの魚が与えられます。そればかりか、主はそれとは別に、弟子たちのために魚を準備し、パンも準備してくださいました。主は溢れんばかりの恵みに満たしてくださいます。

私は今日の御言葉において断食について考えました。断食をすることは主の求めです。日々与えられている食事を絶つことで、日々与えられている食事を主に感謝することができます。主に對する遜りが与えられるからです。

### III 主イエスと出会った弟子たち

私たちは、ここで改めて、主イエスと出会った弟子たちを確認しなければなりません。ペトロは、主イエスが逮捕され十字架に架けられる裁判を受けている時に、主イエスのことを三度知らないと言いました。そのペトロに対して、復活の主イエスは改めてお会いください、主イエスの弟子としての召命が与えられています(二一章一五〜一九節)。

トマスは、他の弟子たちが復活の主イエスと出会ったことを告白しているにも関わらず、彼は最後までそれを信じるできませんでした。復活の主イエスは、トマスの前に立つてください、信じる者へと導いてください(二〇章二四〜二九節)。

ナタナエルについては一章四三〜五一節に記されています。彼もまた、疑っていたのに、主イエスと出会うことにより、信じる者とされ、忠実に主の働き人とされました。

つまり三人は、いずれも疑うものでした。主は私たちに対して、疑う者、あるいは自分の力に頼る者ではなく、主なる神であるイエス・キリストを信じる者、主イエス・キリストに委ねる者であるよう求めています。

イエス・キリストは、今も聖霊をとおして、私たちと共にいてくださいます。私たちはみなしごではありません。ないものに不平不満を語ることなく、日々与えられている食事に對して主の恵みとして感謝し、主イエス・キリストと共に歩み続けましょう。

## 「失敗は成功のもと」

ヨハネによる福音書二一章一五〜一九節

二〇一二年九月九日

### I 失敗を引きずる

復活の主イエスの御前にペトロが立っています。この時、ペトロは頭を上げて、主イエスを見つめることなどできません。なぜならば、主イエスが逮捕される前の夜、主イエスはペトロに躓きを予告されました(マルコ一四章三〇節)。この時ペトロは強く否定しました。しかしペトロは主イエスを裏切り、呪いの言葉さえ口にしました(同一四章七一〜七二節)。そのためペトロはこの出来事を引きずっていました。人は大きな失敗をすると、迷惑をかけた人から隠れようとします(参照・創世記三章七節)。

罪意識を持つことは大切なことです。失敗学を提言し、多くの書籍を記されている方として、畑村洋太郎さんがいます。本来は機械工学の専門家ですが、失敗学の普及に携わっておられます。今回の原発事故でも政府の事故調査委員会の委員長になられた方です。彼は著書「失敗学のすすめ」(二六頁)で次のように語っています。「与えられた設問への答えの出し方を最短距離で学ぶ、まさに合理的学習法ですが、残念ながらこれだけでは吸収した知識を本当に身につけることはできません。とおりいっぺんの形だけの知識は身につくものの、それは深い部分にまでは根づかず、したがって本当の意味での自分の知識として使うことができないからです。この隙間を埋めるには、やはり体感・実感がともなう体験学習が必要で、失敗することをいとわず、失敗体験を積極的に活用する必要があります。……『小さな失敗を不用意に避けることは、将来起こりうる大きな失敗の準備をしていることだ』ということを、もっと私たちは知るべきです」。

### II 主イエスの愛と悔い改め

世における失敗学を確認しましたが、信仰においても同じで良いでしょうか？ 失敗を繰り返さないために失敗から学び、努力することは必要なことです。しかしこれは信仰的な対応ではありません。

ペトロは、主イエスの御前に立っています。主イエスは、ペトロの失敗に対して、叱責されることも、怒られることもありません。主イエスは、ペトロを愛により赦してください。ペトロはもう主イエスの十字架によって罪が赦されています。

三度も主イエスを拒絶したペトロの罪は大きいですが、主は主の御前に立つ者の罪を赦してください。サマリアの女（ヨハネ四章）、姦通を犯した女（同八章）、主イエスと共に十字架に架けられた囚人も同様です。彼らに共通していることは、①主イエスの御前に立つこと。②自らの罪を悔い改め、信仰の告白をすること。③主イエスの愛と罪の赦しに感謝し、救いの感謝に生きようと、信仰の告白をすることです。

「水に流す」という言葉がありますが、主イエスはペトロの罪を水に流してください。ばりません。しかしそうではありません。罪は罪として、いつまでも刻み続けなければなりません。それ以上に、主なる神が罪を赦し、義と認め、神の子として、神の国に入れてくださることを宣言してください。世の中では、遺憾の意を表し、水に流して終わりにすることがあります。そういうことではありません。石丸新牧師は、講演の中で次のようにお語りになります。「遺憾、反省、自省、自責、悔恨、悔悟、懺悔、悔改」最も聖書的かつ包括的な語。悔改あつてこそ、真の謝罪は成り立つ。その内容は、『ウエストミンスター小教理問答』問八七の答にいと明白。罪の自覚と、キリストにある神の恵みの理解とから、罪を悲しみ、憎み、罪を離れて神へ立ち返ること。神に赦され、人に赦されて、新しい服従を決意し、そのように生き抜く努力を傾けて、悔い改めの証しを立て続ける」。

### III 神の愛、キリストの愛

主の御前に私たちが求められていることは、罪をいつまでも覚えつつ、主の御前に悔い改め、信仰を表すことです。そして救いをお与えくださった主イエスの御前に生き続けることです。常に罪を顧み、罪を赦してください。主イエス・キリストと共にいます。主イ

エス・キリストが担われた十字架の痛みを担い続けなければなりません。自らの犯した罪がどれだけ大きいか、主イエスの十字架の苦しみがどれだけ神の愛に満ちたものであったか、それがはつきりと示された時、救い主である主の御前に遜ることができません。だからこそ、私たちは常に主の御前に立ち、律法により自らを顧みる必要があります。

そうすると、主の御前に遜り、主の御言葉、主の命令に聞き従う者へと変えられます。主のお与えくださった罪の赦し、救い、永遠の生命は、非常に大きなものです。そうであるならば、主の命令に対して、私たちはどこまでも聞き従うこととなります。それも殉教の死に至るまでです。なぜなら、ここに救い・真理があるからです。そして永遠の生命と天国の祝福があるからです。罪の刑罰は死です。死すべきペトロが、死すべき私たちが、死から救い出され、天国に入ることが赦されています。だからこそ、私たちはどこまでも主に従い行くのです。

「わたしに従いなさい」

ヨハネによる福音書二一章二〇〜二五節

二〇一二年九月一六日

## 序

ヨハネによる福音書は福音書の最初で「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」と語り始め、福音書をおして、神によって遣わされた主イエスは、真の人間であり、真の神・救い主であることを、私たちに示してきました。そしてヨハネは福音書を閉じるにあたって、あなたにとって真の神であるイエス・キリストとは誰なのかを問いかけています。

## I 信仰のことで他人に目が行く時

ペトロは復活の主イエスと出会い、信仰と献身を新たにすることができました。この時、

ペトロが振り向くと他の弟子たちもいました。ペトロは自分は主イエスに罪を赦して頂いたけれども、他の人たちはどうなのかと思います。主イエスによって愛されている弟子であるヨハネは、最後の晩餐で「主よ、裏切るのはだれですか」と語っていました（一三章二五節）。弟子たちは、「主イエスを裏切るのには自分ではないだろうか？」と不安に思い、弟子たちの間で気まづい雰囲気になっている時に、一番年下であるヨハネに白羽の矢があたり、主イエスに対して問いかけることとなったのではないのでしょうか。ペトロにとって、自分だけ救われて、ヨハネは救われないのかとの思いがあり、主イエスに問いかけます（二一節）。

ここで私たちは、神を信じるとはどういうことかを、問い直さなければなりません。神を否定する人たち、信じようとしなない人たちの中には、「キリスト教は、救われる人と滅びる人がいるから、神は不公平だ」、「前もって滅びに定められた人がいるのは可哀想だ」と語る人たちがいます。この質問は、神を信じる・神による救いに導かれることが、他人事となり、自分自身の立ち位置が消えています。これは信仰を考える上で、非常に問題です。信仰はあなた自身が部外者ではあり得ません。あなたはイエス・キリストを救い主として信じていますか？ このことが問われています。

## II 信仰とは

あなたが神を信じると語る時、神はあなたとの正しい関係、つまり愛に基づく霊的なつながりが生じます。この関係は、罪によって切れていましたが、御子イエス・キリストがあなたを愛してくださり、主イエスの十字架と復活によって回復しました。そしてあなたが主イエスの愛に入れられ、主イエスを救い主と信じる時、あなたは罪の赦しと永遠の生命が与えられ、神を愛し、神を礼拝する者と変えられていきます。

そして、救い主である神との関係が取り戻された時に初めて、「隣人を自分のように愛する」ことができます。これが伝道の原点であり、伝道の力となります。信仰、救いの確信がなければ、伝道も人間の業になります。福音を宣べ伝える伝道とは、救いの喜びに満

たされ、神を愛するように隣人を愛することから、出発しなければなりません。

つまり、神との関係がない状態で、周囲の人たちと神との関係を語ろうとする時、あなたは第三者的、評論家の立場となり、そこには愛、命、血、魂が通った関係がまったくなく、無味乾燥な言葉となります。だからこそあなたと神との関係、つまりあなたにとって主イエス・キリストとはどのようなお方かをはっきりとしなければなりません。主イエス・キリストはあなたのために、十字架で苦しまれ、死を遂げられました。

## III 御言葉を正しく解釈し福音を宣べ伝えよ

「この弟子は死なないというわさが兄弟たちに広まった」（二三節）と語られています。この時、人々は主イエスの言葉を自分勝手に解釈し、主イエスの本来の意味から離れて理解しました。主イエスは「あなたに何の関係もない」と語ろうとされたのです。しかし人々は、この弟子が死なない、つまり主イエスの再臨まで生き続けると解釈しました。ローマ教会は、聖書を解釈するのは教職者だけ、つまり教会が決定することとしました。しかしその結果、中世から宗教改革に至るころには、人々から聖書が取り除けられ、読むことなどできないラテン語聖書のみが用いられ、教会は過ちを犯しました。

プロテスタント教会は、聖書を翻訳し人々の所に届け、人々が自分で聖書を読み・解釈することを勧めました（万人預言者）。しかし誤った解釈をする危険性があることは、変わりありません。だからこそ、教会が信仰告白・教理問答を持つのです。つまり、自分の教会が聖書をどのように読み解き、教会形成を行おうとしているかを、信仰告白によって明らかにします。私たちは信仰告白を学び理解しつつ聖書を読み進む時、正しい聖書解釈へと導かれ、誤った解釈をすることが少なくなり、また、聖書を理解するのは私たち自身ですが、御言葉をお語りになるのは主なる神です。主が私たちに何を語ろうとしているのか、私たちは主の御前に遜り、謙虚に御言葉に聞かなければなりません。